

# ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド, I, 4, 1—17

湯 田 豊

このウパニシャッドの I, 4 は全ウパニシャッドのなかでも特に重要な部分の一つである。しかし、ここでは思想的な問題を論じないで、言語的な分析を試みたいと思う。テキストを十分に検討した上で正確な翻訳をするのが当面のわたくしの課題である。さて、I, 4 は、アートマンからの世界生成についての記述から始まる——

I, 4, 1—*ātmaivedam agra āsīt puruṣavidhaḥ so 'nuvīkṣya nānyad ātmano 'paśyat so 'ham asmīty agre vyāharat tato 'haṁnāmābhavat tasmād apy etarhy āmantrito 'ham ayam ity evāgra uktvā 'thānyan nāma prabrūte yad asya bhavati sa yat pūrvo 'smāt sarvasmāt sarvān pāpmana auśat tasmāt puruṣa ośati ha vai sa taṁ yo 'smāt pūrvo bubhūṣati ya evaṁ veda ||*

*Ātmaivedam agra āsīt puruṣavidhaḥ* という冒頭の文句について、わたくしは若干のことばを費す必要がある。アートマン（＝真実の自己）が人間ないし原人の形をしているという記述はブラーフマナ文献およびウパニシャッドに散見する。シャタパタ・ブラーフマナ、6, 7, 4, 3 にも *puruṣavidham* という形が見られるし、タイッティリーヤ・ウパニシャッド、2, 2—5 にも *eṣa puruṣavidhaḥ* という語形が見いだされる。ここでは、アートマンは人間の形をしていることが明示されている。しかし、言語的に問題になるのは *idam* である。ドイッセンはこの *idam* を *diese Welt* と解釈し、*Am Anfang war diese Welt allein der Ātman, in Gestalt eines Menschen* と訳している。マクス・ミュラー、およびペートリンクもこの *idam* をそれぞれ *this* および *Dieses* と訳しているが、この箇所ではむしろこの *idam* を副詞に解して「ここには」と訳した方

が適切である。ヒレブランド<sup>1)</sup>は、ここの箇所を *Am Anfang war hier nur das Selbst; es war wie ein Mensch* と訳している。それはともかく、ここで注目にあたるのは、アートマンは人間の形をしているということである。シャンカラの注釈によれば、アートマンが人間の形をしているということは、それには頭や足などの特徴が備わっているということである。アートマンが死すべきものか否かを論じる際、このことは問題になる。

さて、われわれは次の文句を検討しなければならない——*so 'nuvikṣya nānyad ātmano 'paśyat so 'ham asmīty agre vyāharat tato 'haṁnā-mābhavat. So 'nuvikṣya nānyad ātmano 'paśyat* という文において、*anuvikṣya* は「見やる」という意味である。確かに、シャタパタ・ブラーフマナ、6, 2, 2, 6 にも *anuvikṣ* の過古形は見いだされる——*prajāpatiḥ prajāḥ sṛṣṭvā anuvyaikṣata tasyātyānandane retaḥ parāpatat* (プラジャーパティが生類を創造した時、彼は見やった。彼はあまりにも歓喜したので精液が滴り落ちた)。チャンドーギヤ・ウパニシャッド、8, 8, 4 においても、プラジャーパティが見やるという記述が見いだされる——*tau hānvikṣya prajāpatir uvācānupalabhya 'tmānam anuvindya vra-jato……Anuvikṣ* という語形に関する限り、アートマンとプラジャーパティの間には近親関係が認められる。このことは、すでにシャンカラが言及している通りである——*so 'haṁ prajāpatiḥ sarvātmā 'ham asmīti agre vyāharat vyāhṛtavān. Nānyad ātmano 'paśyat* における *ātmano* について、マクス・ミュラーは *nothing but his self* と訳しているが、ここでアートマンと称せられるものは決して形而上学的な原理ではなく、自己自身のことを指すのである。スナールはこの箇所を *rien d'autre que lui même*, ベートリンクは *nichts anderes als sich*, ドイッセンは *nichts anderes als sich selbst* と訳している。ヒレブランドの訳はドイッセンのそれと同じである。

*So 'ham asmīty agre vyāharat*——この文句には特に問題はないであろう。もしも *so 'ham asmi* を成句として解釈すれば、「わたくしがそれである」というくらいの意味になるであろう。「わたくしがそれである」というのは、「わたくしはこれ(=この名前)をもっているものである」という意味である。「この名前」というのは、アートマン、すなわち、自

己自身、わたくしのことである。「それから、わたくしという名前が生じた」(tato 'haṁnāmābhavat)。

Tasmād apy etarhy āmantrito 'ham ayam ity evāgra uktvā 'thān-  
yan nāma prabrūte yad asya bhavati——この文句に関して、われわれ  
は aham ayam という語形に注意しよう。Aham ayam は so 'ham asmi  
に対応する。Aham ayam を、われわれは「わたくしはこれである」、あ  
るいは「わたくしはそれである」と訳していいであろう。スナールはこの  
文句を Cést moi と訳し、ベートリンクは、ich bin es, ドイツセンは  
Das bin ich, ミュラーは This is I と訳している。

Sa yat pūrvo 'smāt sarvasmāt sarvān pāpmano auṣat tasmāt  
puruṣa oṣati ha vai sa taṁ yo 'smāt pūrvo bubhūṣati ya evaṁ  
veda——ここで意図されているのは、無価値な通俗語源解釈である。人間  
を意味する *puruṣa* は、通俗語源解釈によれば、pūr(va)+uṣ+a という  
ように分析される。つまり、(この一切の存する) 前に (=pūrva), (すべ  
ての悪を) 焼く (=uṣ), というのが *puruṣa* の語源である。シャンカラ  
は *puruṣa* について次のように注釈している——yasmād evaṁ tasmāt  
puruṣaḥ pūrvam auṣad iti puruṣaḥ, と。要するに、宇宙が存在する以  
前に一切の悪を焼くものとしての *puruṣa* にシャンカラは言及している。

**I, 4, 1 (訳)**——最初、ここにはただ人間の形をしたアートマンだけが  
存在していた。それは見やって、自己自身よりもほかに何も見なかつ  
た。「わたくしはそれである」と最初にそれは発言した。それから、そ  
れは「わたくし」という名前を得た。それゆえ、今でも(他人から)呼  
び掛けられれば、人は「わたくしはこれである」と最初に言ってから、  
自己のほかの名前を告げる。それ(=アートマン)は、この一切の存在  
する前に一切の悪を焼いたのだから、それゆえ、それはプルシャ(= *pur-uṣa*)  
である。実に、このように知っている人は、彼よりも前に存  
在しようと欲するものを焼く。

**I, 4, 2**——so 'bibhet tasmād ekākī bibheti sahāyam īkṣāṁ cakre  
yan mad anyan nāsti kasmān nu bibhemīti tata evāśya bhayaṁ  
vīyāya kasmād dhy abheṣyad avitīyād vai bhayaṁ bhavati ॥

ここで、われわれは単独者としてのアーツマンの恐怖について考察しなければならない。アーツマンが恐怖を感じるという思想にわれわれは接する。このパラグラフに関して文法的に注意しなければならないのは、**abheṣyat** という形であろう。この語は *Bhī* (111, P) という動詞の条件法 (= 未来の過去時制) である。ペートルリンクは、**kasmād dhy abheṣyad** という文句を **wovor hätte es sich fürchten sollen?** と訳しているが、わたくしはペートルリンクの訳に従いたい。

**I, 4, 2 (訳)**——それは恐れた。それゆえ、単独でいる時、人は恐れる。そこで、これ、(=アーツマン) は考えた——わたくしと異なったものが存在しないのに、わたくしは何を恐れるのか？ まさにそれゆえに、その恐怖は消え失せた。それは、実に何を恐れるべきであったろうか？ 実に、恐怖は第二者から生じる。

**I, 4, 3**——**sa vai naiva reme tasmād ekākī na ramate sa dvitīyam aicchat as haitāvān āsa yathā strīpumāṃsau saṃpariṣvaktāu sa imam eva 'tmānam dvedhā 'pātayat tataḥ patiś ca patnī cābhavatām tasmād idam ardhabṛgalaṃ iva sva iti ha sma 'ha yājñavalkyas tasmād ayam ākāśaḥ striyā pūryata eva tām samabhavat tato manuṣyā ajāyanta ||**

古代インドにおいては、疎外は悪の根源とみなされた。旧約聖書の預言者とは異なり、疎外感を深め、孤独に徹することを、彼らは知らなかった。われわれのウパニシャッドにおいても、孤独から解放されて人生の伴侶を求めることが理想とみなされている。彼らは、疎外がないような何らかの共同体を求めたのであった。このことは、次の文章によって生き生きとわれわれに伝えられる——**sa vai naiva reme tasmād ekākī na ramate sa dvitīyam aicchat** (それは快々として楽しまなかった。それゆえ、単独でいる時には、人は楽しまない。それは第二者を望んだ)。ブラーフマナにおけるプラジャーパティの創造の動機は、「わたしは多くなりたい、わたしは繁殖したい」ということである。このことから、すでにブラーフマナ期において、古代インド人が一人でいることに嫌悪感を抱いていたこ



とが知られる。人間の形をしたアートマンは自己の孤独に耐えられず、恐怖の感情に襲われたが、第二者から恐怖が生じることを知って、その恐怖は去った。しかし、それにもかかわらず、それは快々として楽しまなかった。そこで、アートマンは第二者を望んだのである。

Sa haitāvān āsa yathā strīpumāmsau sampariṣvaktau sa imam eva 'tmānaṃ dvedhā 'pātayat tataḥ patiś ca patnī cābbavatām——この文章において、われわれはアートマンの創造について知ることが出来る。孤独の感情が、アートマンの創造を動機づけたというわけである。ここで、三つの点が注目すべきである。まず最初に、yathā strīpumāmsau sampariṣvaktau という表現に注目すべきである。創造が男女、あるいは夫婦のセックスによって行なわれるということは最高に興味深いが、同時に strīpumāmsau という語形によって示されているように、ここでは女 (strī) と男 (pums) という語順になっている。第二に、sa imam eva 'tmānaṃ dvedhā 'pātayat という表現が問題である。アートマンは男女、あるいは夫婦が抱擁しているほどの大きさであったと言われているにもかかわらず、わたくしはアートマンを身体と訳すことを拒否し、それを自己あるいは自己自身と訳した。私見によれば、ここではアートマンには身体という意味はないからである。シャンカラはアートマンを身体 (śarīra) と解釈し、プラジャーパティとしてのアートマンが身体を二つに分割したと注釈している。最後に、pati と patnī という語について。夫を意味する pati, 妻を意味する patnī という語、および apātayat という語は、すべて「ことばの遊び」である。そこには、特に深い意味はない。しかし、いずれにせよ、ここでは男女の性的な営みから全人類が創られ、その後で彼らの一対にならって動物が創造される。

Pati と patnī のことばの遊びの後に、われわれのテキストは次のように続く——tasmād idam ardhabṛgalam iva sva iti ha sma 'ha yājñavalkyas tasmād ayam ākāśaḥ striyā pūryata eva tāṃ samabhavat tato manuṣyā ajāyanta. この文章のなかで難解なのは、tasmād idam ardhabṛgalam iva sva iti ha sma 'aha yājñavalkya という箇所である。Idam ardhabṛgalam iva sva という問題の箇所を、ミュラーは We two are thus (each of us) like half a shell と訳した。しかしミュラーよりも以前に、ベートリンクはこの箇所を wir zwei sind auf diese Weise

jedes gleichsam ein halbes Stück と訳している。ヒレブラントもベートリンクに従っている。しかるに、ドイッセンは……ist dieser Leib an dem Selbst gleichsam eine Halbscheid と訳したのである。しかし、ドイッセンの訳の明らかに誤訳である。ドイッセンは idam を「この身体」(dieser Leib) と訳したが、idam には身体という意味はない。ジャンカラは idam を śarīra (身体) と注釈したが、この idam は ardhabṛgālam を限定する語である。さらにドイッセンは sva を sve (於格) の意味に取り、これを ātmani と等しいと考えたが、このような解釈に対してベートリンクは痛烈な批判を加えている<sup>2)</sup>。ベートリンクは、およそ次のように言ってドイッセンの解釈を批判している——「もしも sva が名詞的な再帰代名詞（それでもなお、それはアートマンとまったく同じではない）であり、そして idam が主語であれば、その場合には sve はとにかく idam に関連するに違いない。そして、そのことはナンセンスであろう。すなわち、その場合には次のような意味になるであろう——それゆえ、この身体はみずからにおいて、いわば片割れである」と。わたくしは、ベートリンクのこの批判は正しいと思う。ベートリンク自身は sva を svaḥ、すなわち、定動詞として理解し、これを wir zwei sind と解釈した。Svaḥ は As という動詞の双数の一人称でもある。わたくしは、sva に関してベートリンクの推測を正しいものとして受け入れた。

ヒュームは、問題の箇所を Oneself (sva) is like a half-fragment と訳している<sup>3)</sup>。この英文は、一見、sva を主語と解釈することを容認するような印象を与えるが、sva は再帰代名詞としては主語になれない。ヒュームが sva を主語として解釈したはずはないであろう。ジャンカラは svaḥ=ātmanah と注釈しているが、ヒュームはこの注釈に従ったのであろう。少くとも、svaḥ を主語と解釈することは不可能である。

さて、われわれは最後の文句に一瞥を投げねばならない——tasmād ayam ākāśaḥ striyā pūryata eva tāṃ samabhavat tato manuṣyā ajāyanta. ここでわれわれの興味をそそるのは、samabhavat という表現である。Saṃbhū は、「性交する」ことを意味する。従って、人類は始祖としての男と女、夫と妻の性的な結合、セックスによって誕生したということになる。セックスは決して汚らわしいものではないという思想は、古代インドに特徴的である。ブラーフマナ文献においては近親相姦、特に父と

娘の性的な関係が扱われているが、われわれのウパニシャッドにおいては夫と妻の性的な関係によって人類が生じる。シャンカラは *samabhavan* について *maithunam upagatavān* という注釈をしている。

**I, 4, 3 (訳)**——それ（アートマン）は怏々として楽しまなかった。それゆえ、単独でいる時には、人は楽しまない。それは第二者を望んだ。それは抱擁している夫妻の大きさであった。それは、自己自身を二つの部分に分割した。それから、夫と妻が生じた。それゆえ、われわれ兩人は、いわば、この片割れである、とヤージニャヴァルキヤは言うのを常とした。それゆえ、この空虚は妻によって満たされる。彼は妻を抱いた。それから、人間が生まれた。

**I, 4, 4**——so heyam ikṣāṃ cakre katham nu mā 'tmana eva janayitvā sambhavati hanta tiro 'sānīti sā gaur abhavad ṛṣabha itaras tām sam evābhavat tato gāvo 'jāyanta vaḍavetarā 'bhavad aśvavṛṣa itaro gardabhītarā gardabha itaras tām sam evābhavat tata ekaśapham ajāyatājetarā bhavad basta itaro 'vir itarā meṣa itaras tām sam evābhavat tato 'jāvayo 'jāyantaivam eva yad idaṃ kim ca mithunam ā pipīlikābhyas tat sarvam asṛjata ||

I, 4, 4 においては動物の創造が説かれている。ここで面白いのは、アートマンからの創造が一對をなすもの、すなわち、生殖による創造に限定されていることである。有機体の創造については素朴な説明が加えられているが、無機物についてはまったく言及されていない。この箇所においても重要な語は *Srj* である。まず最初にテキストのことばについて簡単な考察を試みよう。まず最初に、われわれは次のような文句に接する——so heyam ikṣāṃ cakre katham nu mā 'tmana eva janayitvā sambhavati hanta 'sānīti. *So* は *sā+u* と分析することが出来る。ここで、妻はアートマンのなかから生み出されたのに、アートマンと性的な関係をもつことになる。それゆえ、われわれは近親相姦の思想の名残りをこのテキストのなかにかすかに認めることが出来る。シャタパタ・ブラーフマナ, I, 7, 4, 1 によれば、「実に、ブラジャーパティは自己の娘に懸

想した……わたしは彼女と性交しよう、と考えて、彼は彼女を抱いた」のである。父と娘の近親相姦の思想は、すでにリグ・ヴェーダ、10, 61, 7 にも見いだされる。シャタパタ・ブラーフマナの当該箇所最後の部分は *mithuny enayā syām iti tām sambabhūva* である。われわれのウパニシャッドの当該箇所は、*katham nu mā' tmana eva janayitvā sambh-avati* となっている。リグ・ヴェーダ、10, 61, 7 には、*pitā yāt svām duhitāram adhiṣkán kṣmayā rétaḥ samjagmānó niṣīñcat* という文句がある。わたくしはこのリグ・ヴェーダの文句を次のように訳した——「父が自己の娘の上に覆いかぶさった時、彼は性交をしながら大地に精液を注いだ」と。しかし、シャタパタ・ブラーフマナ (1, 7, 4, 2—4) によれば、自己の娘、われわれの姉娘に対する近親相姦は罪悪である。このことを踏まえて、われわれは次の文章を読もう——「彼はわたしを自己自身のなかから生んだのに、どうしてわたくしを抱くのであろうか？ さあ、わたくしは隠れよう！」(*katham nu mā' tmana eva janayitvā sambh-avati hanta tiro 'sāni*)。彼女は夫でしかも自己の親であるアートマンから身を隠すために、ほかの生類に姿を変えるのである。

*Sā gaur abhavad ṛṣabha itaras tām sam evābhavat tato gāvo 'jāyanta vaḍavetarā 'bhavad aśvavr̥ṣa itaro gardabhitarā itaras tām sam evābhavat tata ekaśapham ajāyatājetarā 'bhavad basta itaro 'vir itarā meṣa itaras tām sam evābhavat tato 'jāvayo 'jāyanta*——この長いテキストに関して、わたくしは *Sambhū* という語が決定的な意味をもっている事実を指摘したい。*Sambhū* (性交する) と、その結果としての子孫の誕生 (*Jan*) の関連にわれわれは注意を払うべきである。アートマンからの「創造」と「出生」とは極めて密接な関係にある。「創造する」(*Srj*) という行為は、性的な繁殖に影響されるところ多大である。

しかるに他方、「創造する」(*Srj*) という行為には、男性的および女性的起源の一对という名の二元性から解放されている面も存在する。つまり男と女、夫と妻が有機体の世界を創造するのではなく、創造者としてのアートマンがみずからのなかから世界を創るという思想が「創造する」という行為に含蓄されている。次の文章は、アートマンが創造者であることをわれわれに生き生きと伝えるであろう——*evam eva yad idam kim ca mithu-*

nam ā pipīlikābhyas tat sarvam asṛjata.

**I, 4, 4 (訳)**——しかし、彼女は次のように考えたのであった——彼はわたくしを自己自身のなかから生んだのに、どうしてわたくしを抱くのであろうか？ さあ、わたくしは隠れよう！ 彼女は雌牛になり、他のものは雄牛になった。彼は彼女を抱いた。それから牛が生まれた。あるものは雌馬になり、他のものは雄馬になった。あるものは雌ろばになり、他のものは雄ろばになった。彼は彼女を抱いた。それから単蹄類が生まれた。あるものは雌山羊になり、他のものは雄山羊になった。あるものは雌羊になり、他のものは雄羊になった。雄は雌を抱いた。それから山羊と羊が生まれた。このように、それ（＝アートマン）は、蟻に至るまで、およそここで一對をなすものをすべて創造した。

**I, 4, 5**——so 'ved ahaṃ vāva sṛṣṭir asmy ahaṃ hīdaṃ sarvam asṛksīti tataḥ sṛṣṭir abhavat sṛṣṭyām hāsyaitasyām bhavati ya evaṃ veda ||

わたくしは *sṛṣṭi* という語をどう訳すかについて若干の困惑を覚える。*Sṛṣṭi* は、一方においては、能動的な意味に解される。創造するという行為、あるいは創造を、それは意味する。もちろん、*Srj* は厳密な意味では創造を意味しない。*Srj* は、元来、みずからのなかから放出する、射出する行為であり、わたくしは、*Srj* を「流出する」と訳するのが適切であると思う。しかし、わたくしはここでは *sṛṣṭi* を「流出」と訳さないで「創造」と訳した。しかし、*sṛṣṭi* は「創造」のほかに受動的に解釈することも出来る。創造されるという事実、あるいは創造の過程もまた *sṛṣṭi* である。しかし、その場合には、われわれは *sṛṣṭi* を被創物と訳してもよい。シャンカラは *sṛṣṭi* について次のように注釈している——*ahaṃ vāvāham eva sṛṣṭiḥ sṛjyata iti sṛṣṭam jagad ucyate sṛṣṭir iti*, と。

So 'ved ahaṃ vāva *sṛṣṭir* asmy ahaṃ hīdaṃ sarvam asṛkṣi という文句を読む時、わたくしは *sṛṣṭi* を受動的な意味に取ることをためらう。この場合には、むしろ「創造者」という訳が適していると言ってよい。なぜなら、わたくしはこの一切を創造したからである。結局、*sṛṣṭi*



に関しては、創造者と被造物を本質的に区別するヘブライ的ないしキリスト教的な解釈を、われわれは放棄しなければならない。ウパニシャッド的な発想によれば、「わたくし」(aham)と「この一切」(idaṃ sarvam)の間には何の差別もない。このわたくしによって創造された世界は、まったくわたくしと異なるところはない——このような思想がウパニシャッド文献の根底に流れている。アートマンという名の創造者は、みずからのなかから「この一切」を創造した、それゆえ、アートマンとこの一切とは同一である、というのが、I, 4, 5の趣旨である。

**I, 4, 5 (訳)**——「まことに、わたくしは創造である。なぜなら、わたくしはこの一切を創造したから」とそれ(＝アートマン)は知った。それから、それは創造になった。このように知っている人は、それ(アートマン)のこの創造にあずかる。

**I, 4, 6**——athety abhyamanthat sa mukhāc ca yoner hastābhyām cāgnim asṛjata tasmād etad ubhayam alomakam antarato 'lomakā hi yonir antarataḥ | tad yad idaṃ āhur amuṃ yajāmuṃ yajety ekaikaṃ devam etasyaiva sā viśṛṣṭir eṣa u hy eva sarve devāḥ | atha yat kiṃ cedam ārdraṃ tad retaso 'sṛjata tad u soma etāvad vā idaṃ sarvam annaṃ caivānnādaś ca soma evānnam agnir annādaḥ saisā brahmaṇo 'tisṛṣṭih | yac chreyaso devān asṛjatātha yan martyaḥ sann amṛtān asṛjata tasmād atisṛṣṭir atisṛṣṭyām hāsyaitasyām bhavati ya evaṃ veda ||

アートマンが祭祀の行為を行なうというのは奇妙である。しかし、われわれのテキストは、アートマンが次のような行為をするという記述をしている——athety abhyamanthat sa mukhāc ca yoner hastābhyām cāgnim asṛjata, と。「それから、それ(アートマン)は(点火しようとして)次のように摩擦した。それは子宮(＝火の淵源)としての口と両手から火を創造した」とこのように訳すことが出来る。『アーパスタンバ・シュラウタ・スートラ』(7, 12, 12)には「お前はアグニ(火)の出生の場所(＝子宮)である」という祭詞が見いだされる。いずれにせよ、こ



ここではアートマンは一個の人間として描かれている。口と両手から火を創造するというアートマンの行為は、次のように説明される——*tasmād etad ubhayam alomakam antarato 'lomakā hi yonir antarataḥ*, と。「それゆえ、これらは両方とも内部に毛がない。なぜなら、子宮は内部に毛がないから」。

*Tad yad idam āhur amuṃ yajāmuṃ yajety ekaikaṃ devam etas-yaiva sā viśṛṣṭir eṣa u hy eva sarve devāḥ*——ここで、われわれはアグニ（火）に次いで神々の創造を論じなければならない。ドイッセンはこの部分 (*viśṛṣṭi*) を I, 4, 6 の冒頭に置くことを提案している。それはともかく、ここで問題になるのは *viśṛṣṭi* という語であろう。わたくしは、この語を「個別的創造」と訳した。神々は、男女のセックスではなく、アートマンによる個別的創造である。このことを、われわれのテキストは *sṣa u hy eva sarve devāḥ* と言っている。ここでは、アートマンはすべての神々である。スナールの訳は直訳である。この箇所を彼は次のように訳している——*c'est lui seul qui est tous les dieux*, と。

*Atha yat kiṃ cedam ādraṃ tad retaso 'sr̥jata tad u soma etāvad vā idam sarvam annaṃ caivānnādaś ca soma evānnam agnir annādaḥ saiṣā brahmaṇo 'tisṛṣṭiḥ*——このテキストに関して、わたくしは二つの重要な思想に着目したい。一つは、思想的な検討に値する食物の哲学の萌芽がここに認められることである。一つは言語的に見て興味深い *atisṛṣṭi* という語形である。アートマンは子宮としての口と両手から火を創造した、とわれわれは言った。しかし、子宮から創造されたアグニは食物を食べるもの (*annāda*) であり、精液 (*retas*) から創造されたものはソーマ (*Soma*) という名の神酒である。そして、このソーマは食物 (*anna*) である。そして、ソーマが湿っているのに反し、アグニは火である。アートマンによって創造された世界は「食うもの」と「食われるもの」、すなわち、「食物を食うもの」と「食物」の二つから構成されている。世界が食物とそれを食うものから成り立つという、この極めて重要な思想を、われわれは忘れ去るべきではない。ブラフマンの *atisṛṣṭi* は、食物と食物を食うものという思想と内面的関連をもっている。

*Saiṣā brahmaṇo 'tisṛṣṭiḥ*——この文句について、わたくしは考察したい。この文句を正しく理解するためには、われわれは次に続く文句を考慮

に入れねばならない。しかし、ここでは、*saiṣā brahmaṇo 'tisṛṣṭih* という文章だけに限定しよう。ここで極めて奇妙に思われるのは、突然、ブラフマンという語が登場することである。「これが、ブラフマンの超創造である」——われわれのテキストはこのように言う。*Atisṛṣṭi* は、みずからのなかから自己よりも優れたものを創造するゆえ、このように呼ばれる。シャンカラの注釈によれば、*atisṛṣṭi* は *devasṛṣṭi* すなわち、神々の創造と等しい。*Brahmaṇo 'tisṛṣṭih* の代わりに、われわれは *ātmano 'tisṛṣṭih* という表現を用いたい衝動に駆り立てられる。しかし、原文は *ātmanah* ではなく *brahmaṇah* である<sup>4)</sup>。

*Saiṣā brahmaṇo 'tisṛṣṭih* を説明する文章が続く。われわれは、それを以下に挙げよう——*yac chreyaso devān asṛjatātha yan martyaḥ sann amṛtān asṛjata tasmād atisṛṣṭir atisṛṣṭyām hāsyaitasyām bhavati ya evaṃ veda. Martya* というのは、「死すべきもの」というくらいの意味である。これは、アートマンのことを指す。アートマンが死すべきものであるという思想は極めて興味深い。ブラーフマナからウパニシャッドに至るまで、アートマンは不死であるとみなされて来た。シャタパタ・ブラーフマナ、2, 2, 2, 8 には *anātmā hi martyaḥ* という有名な文句が見いだされる。アートマンは不死であるというのが、ブラーフマナの支配的な見解である。同じように、シャタパタ・ブラーフマナ、10, 4, 2, 21 には、アートマンは人間における不死なるものである、という記述がある。ウパニシャッドにおいては、アートマンが不死であるという思想は至るところに散見する。わたくしは、特に出典を挙げる必要を認めない。しかるに、当該箇所において、われわれはアートマンが「死すべきもの」であることを知った。これは、極めて注目すべきことである。ブラーフマナからウパニシャッドに至るまで、アートマンは「不死なるもの」として、われわれの前に現われる。しかるに、ここでは、なぜ、アートマンは死すべきものなのであろうか?

この点について、オランダのゲルダー女史の発言は特記に値する。ヴァン・ゲルダー女史は次のように言っている。女史によれば、「アートマンは創造のなかに、人間と動物のなかへ入っていったので、それは不死になった」<sup>5)</sup> のである。アートマンは子宮としての口および両手から火を、自己の精液からソーマを創ったが、この二つは同時に祭祀の材料でもあ

る。そして、精液は人間の本質である。フォン・ゲルダー女史によれば、「生類の創造によって、アートマンはみずから死すべきものにした」<sup>9)</sup>のである。火と湿気の創造によってアートマンは死すべきものになったというゲルダー女史の記述は示唆に富んでいる。死は生命のあるものにしか起こらない。無機物は死なない。なぜなら、無機物には生命は宿らないからである。死ぬのは、専ら性的な繁殖に頼る存在だけである。高次の有機体にだけ死は起こる。アートマンは自己のなかから女性を創り、彼女との性的な関係によって人類を始め蟻に至るまで、一対をなす生類を創造した。たとい、男性と女性という二元性原理に頼らないでアグニとソーマという二つの祭祀の材料によって創造を行なうとしても、アートマンは、フォン・ゲルダー女史の言うように、「自家受精」(Selbst-befruchtung)、あるいは「自己交接」(Selbst-begattung)を行なうのである。セックスによる生殖のあるところには、かならず死がある。神々が不死であるのに対しアートマンは元来死すべきものである、それゆえ、アートマンは死すべきものである——このように考えるのは正しくない。ブラーフマナ文献によれば、神々は最初死すべき存在であり、後に不死になった<sup>10)</sup>。そして、アートマンは最初から不死なるものである<sup>11)</sup>。アートマンが「死すべきもの」と考えられるのは、アートマンがわれわれのウパニシャッドの当該箇所ではセックスの原理によって世界を創造するものであるからである。われわれは、*martyah* という語をセックス、および生殖との連想で解釈すべきであろう。

「死すべきもの」としてのアートマンがアグニ(食物を食うもの)とソーマ(食物)を本質とする世界を創造したことは容易に説明される。アグニとソーマはリグ・ヴェーダ以来「不死なるもの」(*amṛta*)とみなされている。不死なるものというのは、単純に神々のことである。アグニとソーマは、セックスによる創造とは無縁である。ここでは、アグニとソーマを始めとする神々をアートマンが創造したということになるであろう。

**I, 4, 6 (訳)**——それから、それ(アートマン)は(点火しようとして)次のように摩擦した。それは子宮(=火の淵源)としての口と両手から火を創造した。それゆえ、これらは両方とも内部に毛がない。なぜなら、子宮は内部に毛がないから。人々が、「これを祭れ!」、「あれを祭

れ！」と言う時、それぞれの神はまさにこれ（＝アートマン）の個別的創造である。なぜなら、これは一切の神々であるから。およそ湿っているものを、それ（アートマン）は精液から創造した。そして、それはソーマである。そして、これだけの大きさのこの一切は、食物であるか、あるいは食物を食うものであるかのいずれかである。食物はソーマであり、食物を食べるものはアグニである。これが、ブラフマンの超創造である。それ（アートマン）は自己よりも優れた神々を創造したのだから、それは死すべきものであるのに不死なるものを創造した。それゆえ、それは超創造である。このように知っている人は、そのこれ（＝超創造）にあずかる。

I, 4, 7—*tad dhedaṃ tarhy avyākṛtam āsīt tan nāmarūpābhyām eva vyākriyatāsaunāma 'yam idaṃrūpa iti tad idam apy etarhi nāmarūpābhyām eva vyākriyata 'saunāma 'yam idaṃrūpa iti sa eṣa iha praviṣṭaḥ | ā nakhāgrebhyo yathā kṣuraḥ kṣuradhāne 'vahitaḥ syād viśvaṃbharo vā viśvaṃbharakulāye taṃ na paśyanti | akṛtsno hi sa prāṇann eva prāṇo nāma bhavati | vadan vāk paśyaṃś cakṣuḥ śṛṇvañ śrotram manvāno manas tāny asyaitāni karmanāmāny eva | sa yo 'ta ekaikam upāste na sa vedākṛtsno hy eṣo 'ta ekaikena bhavaty ātmety evopāsītātra hy ete sarva ekaṃ bhavanti | tad etat padanīyam asya sarvasya yad ayam ātmā 'nena hy etat sarvaṃ veda | yathā ha vai padenānuvinded evaṃ kīrtiṃ ślokaṃ vindate ya evaṃ veda ||*

I, 4, 7 におけるアートマンは、I, 4, 1—6 までのアートマンとは異質である。もちろん、両者の間に断続を認めまいとする努力も存在する。しかし、わたくしは I, 4, 1—6 までのアートマンと I, 4, 7 におけるアートマンとは区別されるべきであると考え。創造 (sṛṣṭi) 観においては、アートマンと世界とは一つである。なぜなら、アートマンはみずからのなかから世界を創ったからである。しかるに、ここからわれわれが扱う箇所においては、万物に内在するアートマンは、爪の先まで入ったアートマンである。両者は、明らかに異なっている。しかるに、タイッティリーヤ・

ウパニシャッド, 2, 6 においては, この二つのアートマンは一つに総合されたのである——*idaṃ sarvāṃ asṛjata | yad idaṃ kiṃ ca | tat sṛṣṭvā | tad evānuprāviṣat*, と。しかし, I, 4, 7 に関する限り, アートマンが創造であるという痕跡は何処にも発見されない。当該箇所においては, アートマンが世界のなかに入ることによって, 未開展であった世界が名称と形態によって開展されるということが記述されているだけである——*tad dhedaṃ tarhy avyākṛtam āsīt tam nāmarūpābhyām eva vyākriyatāsaunāma 'yam idaṃrūpa iti tad idaṃ apy etarhi nāmarūpābhyām eva vyākriyata 'saunāma 'yam idaṃrūpa iti sa eṣa iha praviṣtaḥ*. 世界が名称と形態によって開展されるのは, アートマンがそのなかに入るからである。*Sa eṣa iha praviṣtaḥ* という文句は, われわれにチャンドーギヤ・ウパニシャッド, 6, 3, 3 の文句——*seyam deva-temās tisro devatā anenaiva jīvena 'tmanā 'nupraviśya nāmarūpe vyākaravāṇīti*——を思い出させる。そして, 世界のなかに入る (*praviś*) アートマンが微細で肉眼によって認められないというのが特徴的である。

われわれのウパニシャッドは, 次のような比喩を用いて, このことを説明している——*ā nakhāgrebhyo yathā kṣurāḥ kṣuradhāne 'vahitaḥ syād viśvambharo vā viśvambharakulāye taṃ na paśyanti taṃ na paśyanti*, と。この文章を, われわれは次のように訳そう——あたかも剃刀が剃刀の容器に収められるように, あるいは火が炉のなかに入れられるように, 爪先までそれ (=アートマン) は入った。それを人々は見ない, と。なぜ, アートマンを人々は見ないのであろうか? この問いに対して, われわれのウパニシャッドは次のように答える——*akṛtsno hi sa prāṇann eva prāṇo nāma bhavati | vadan vāk paśyamś cakṣuḥ śṛṇvañ śrotram manvāno manas tāny asyaitāny karmanāmāny eva*, と。*Akṛtsno hi sa prāṇann eva prāṇo nāma bhavati* という文句は, 特にわれわれの注目に値する。全体的なもの (*krtsna*) は現象界に登場しないということがここで意味されているのであろうか? それとも, アートマンは, 不完全な形においてではあるけれども, 現象することが可能なのであろうか? 全体的なものが現象界に登場しないとすれば, 現象とは別の本質が存在することは否定される。しかし, 不完全な形であろうと, 全体的なものが現象するとすれば, それは行為をする (息をしたり, 語ったり,



あるいは見たりする) のであって、アートマンを発見する道は経験を通じてのみ可能となる。しかるに、われわれのウパニシャッドは、次のように言う——なぜなら、それは非全体的であるから。息をしている時には、それは息と呼ばれる。語っている時には、それはことば、見ている時には眼、聞いている時には耳、考えている時には心と呼ばれる。これらは、それ (=アートマン) の行為の名称にほかならない。 **Tāny asyaitāni karmanāmāny eva** (これは、その行為の名称にほかならない) という文句は、わたくしにアートマンの行為が現象界に登場することを確信させるのに十分である。アートマンの本質を理解することは、ここでは放棄されている。息をしたり語ったりするというような結果、あるいは アートマンの行為を理解すれば、われわれはアートマンについて知ることが出来るはずである。

Sa yo 'ta ekaikam upāste na sa vedākṛtsno hy eṣo 'ta ekaikena bhavaty ātmety evopāsitātra hy ete sarva ekam bhavanti——このテキストは、極めて重要な部分である。われわれはまず最初に、アートマンが 全体的なものとして現われない ことを確認しなければならない。しかし、息をしたり語ったりするという行為は個々のものではなく、アートマンのそれである。個々のものは、すべてアートマンという全体的なもの・一つ (eka) であるものの現象形態である。次いで、われわれは *Upās* という語に特別の注意を払わねばならない。*Upās* は、普通、「崇拝する」と訳される。ベートリンク、ドイッセン、マクス・ミュラー、ヒレブランなどの諸大家は *Upās* を *verehren* ないし *worship* と訳している。ラダクリシュナンは、これを *meditate* と訳している<sup>9)</sup>。スナールは、ある時には *Upās* を *considérer*、ある時には *reconnaître* と訳している。シャンカラは、この語に対して *manasā 'yam ātmety upāste cintayati* と注釈している。シャンカラによれば、*Upās* は「沈思する」、「熟考する」というくらいの意味である。

*Upās* の原義は、確かに、「近くに坐る」ことである。しかし、「近くに坐る」というのは決して弟子が師匠の近くに坐ることではなく、シャイエルの言うように<sup>10)</sup>、「何かあるものに近づく」ことである。つまり、*Upās* というのは、「言い寄る」、「せがむ」、または「熱心に求める」ことである。*Ātmety evopāsita* と言われる時には、人は個々のものを「まさに



アートマンとして熱心に求めるべきである」ということが意味されている。ここでは、「まさにアートマンとして崇拝すべきである」、あるいは「まさにアートマンとして瞑想すべきである」のは不適切である。シャタパタ・ブラーフマナ, 10, 6, 3, 12 の文句——*satyaṃ brahmety upāsita* を、「真理はブラフマンである、とこのように人は（真理を）崇拝すべきである」という訳すのはナンセンスである。シャイエルのように、われわれはこの文句を「真理はブラフマンである、とこのように人は（真理を）熱心に求めるべきである」と訳すべきであろう。チャンドーギヤ・ウパニシャッド, 1, 1 の文句——*om ity etad akṣaram udgītham upāsita*——を、われわれは「オームの音節として人はウドギータを熱心に求めるべきである」と訳してよい。カウシータキ・ウパニシャッド, 3, 2 に *mām āyur amṛtam ity upāsava* という文句がある。「わたくし（＝インドラ）を、生命および不死として熱心に求めよ！」と訳せば意味は明瞭になる。そして、アートマンを *Upās* する人は誰であれ、自己が熱心に求める人は、自己の願望を成就することが出来るのである。

さて、われわれは *sa yo 'ta ekaikam upāste na sa vedākṛtsno hy eṣo 'ta ekaikena bhavaty ātmety evopāsītātra hy ete sarva ekaṃ bhavanti* という文章を、次のように訳したのである——それらのなかの個々のものを熱心に求める人は知らない。なぜなら、これはそれらのなかの個々のものとして存在し、全体ではないからである。人はそれをまさにアートマンとして熱心に求めるべきである。なぜなら、ここにおいて（＝アートマンを熱心に求めることにおいて）、これらのすべて（＝息、ことば、眼など）は一つになるからである、と。 *Atra hy ete sarva ekaṃ bhavanti*——アートマンは現象の背後、あるいは彼岸に存在する形而上学的な原理ではない。アートマンは「このすべて」（*ete sarve*）である。チャンドーギヤ・ウパニシャッド, 2, 21, 4 には *sarvam asmīty upāsita* と述べられている。アートマンは、人間によって経験されるのである。人は自己を全体的なもの（*kṛtsna*）として意識する。アートマンは個々のものとして存在するけれども、それらのすべてはアートマンを熱心に求めるという行為を通じて全体的なもの、あるいは同じことだが、一つであるものになるというわけだ。

わたくしが全体的なものであるということは、どのようにして知られる

のであろうか？ われわれの ウパニシャッドは次のように言う——*tad etat padaniyam asya sarvasya yad ayam ātmā 'nena hy etat sarvaṃ veda | yathā ha vai padenānuvinded evaṃ kīrtiṃ ślokaṃ vindate ya evaṃ veda*——ここで、われわれは *padaniya* という語に一瞥を投げねばならない。シャンカラはこの語を *pada* と注釈している。シャンカラは、*pada* という語によって、牛などのことによってしるしを付けられた場所が意味されると言う。いずれにせよ、*padaniya* は追跡されるべきもの、すなわち、足跡を意味する。*Padaniya* さえ正しく理解出来れば、このテキストの意味は明瞭である——「このアートマンは、この一切の足跡である。なぜなら、人はこれによってこの一切を知るから。実に、人が足跡によって（牛などを）見いだすように、このように知っている人は、このように名声と栄光を獲得する」と。アートマンは個々のもの、すなわち、*akṛtsna* として熱心に求められる時には、現象界に登場する。それゆえ、このアートマンは全体的なもの、あるいは同じことだが、この一切 (*idaṃ sarvaṃ*) の現象である。つまり、非全体的なものとしての資格において、アートマンは世界にその痕跡をとどめるのであり、それが *padaniya* (追跡されるべきもの・足跡) である。

**I, 4, 7 (訳)**——その時、これは未開展であった。「これは、あのような名称をもち、このような形態をもっている」と、このように、それは名称と形態によって開展された。現在でも、「これは、あのような名称をもち、このような形態をもっている」と、このように、これは名称と形態によって開展される。あたかも剃刀が剃刀の容器に収められるように、あるいは火が炉のなかに置かれるように、爪先までそれ（アートマン）は入った。それを人々は見ない。なぜなら、それは非全体的であるから。息をしている時には、それは息と呼ばれる。語っている時には、それはことば、見ている時には眼、聞いている時には耳、考えている時には心と呼ばれる。これらは、それ（アートマン）の行為の名称にほかならない。それらのなかの個々のものを熱心に求める人は知らない。なぜなら、これはそれらのなかの個々のものとして存在し、全体ではないからである。人はそれをまさにアートマンとして熱心に求めるべきである。なぜなら、ここにおいて（アートマンを熱心に求めることにおい

て), これらのすべては一つになるからである。このアートマンは, この一切の足跡である。なぜなら, 人はこれによってこの一切を知るから。実に, 人が足跡によって(牛などを)見いだすように, このように知っている人は, このように名声と栄光を獲得する。

**I, 4, 8**—*tad etad preyaḥ putrāt preyo vittāt preyo 'nyasmāt sarvasmād antarataraṃ yad ayam ātmā | sa yo 'nyam ātmanaḥ priyaṃ bruvāṇaṃ brūyāt priyaṃ rotsyatīśvaro ha tathiva syād ātmānam eva priyaṃ upāsita sa ya ātmānam eva priyaṃ upāste na hāsyā priyaṃ pramāyukaṃ bhavati ||*

ブリハッド・アーラニヤ・ウパニシャッド, 2, 4, 5 に *ātmanas tu kāmāya sarvaṃ priyaṃ bhavati* という文句がある。*Tad etad preyaḥ putrāt preyo vittāt preyo 'nyasmāt sarvasmād antarataraṃ yad ayam ātmā* (このアートマンは息子よりもいとしく, 財産よりもいとしく, この一切よりもいとしく, われわれの内部にある) という文句は, アートマンが価値の淵源であることを示唆する。しかし, この文句は *āt-mety evopāsita* に対応する。アートマンだけを, 人は熱心に求めるべきである——このことは, アートマンがすべてのものよりもわれわれにとって価値があることを示すからである。われわれは, **I, 4, 8** において *ātmānam eva priyaṃ upāsita* (人はアートマンだけをいとしいものとして熱心に求めるべきである) という文句を見いだすのである。

*Sa yo 'nyam ātmanaḥ priyaṃ bruvāṇaṃ brūyāt priyaṃ rotsyatīśvaro ha tathaiva syād*——文法的に問題なのは, *īśvara* である。*īśvara* はここではヴェーダの神, あるいはそれに類するものを意味するのではない。それは単純に……することが出来る, ……する能力をもっている, というくらいの意味である。シャンカラは *īśvara* について *īśvaraḥ samarthāḥ paryāpto 'sau evaṃ vaktum* と注釈している。彼の注釈は正しい。そして, *īśvaro ha tathaiva syāt* というのは, 「そのようになることはあり得る」, 「そのようになる可能性がある」, 「ひょっとして, そのようになるかもしれない」というほどの意味である。デルブリュックは *Altindische Syntax* (1888 年。343 ページ) のなかで, シャタパタ・ブ

ラーフマナ, 12, 4, 3, 8 の *īśvaro ha tathaiva syāt* について, *so könnte es wohl so geschehen* という訳を与えている。*Īśvara* が *syāt* という願望法と結合する時, それは可能な帰結を表現する。ベートリンクやマクス・ミュラーなどは *īśvaro ha tathaiva syāt* をこのように翻訳しているが, ドイツセンだけは, *der kann Herr sein, dass dies also geschehe* と訳している。ドイツセンの *īśvara* の解釈は明らかに間違いである。So *yo 'nyam ātmaṇaḥ priyaṁ bruvāṇaṁ brūyāt priyaṁ rotsyatitīśvaro ha tathaiva syād*——この文句を, わたくしは次のように訳した——他のものがアートマンよりもいとしいと語る人に対して, 人が「彼はいとしいものを失うであろう」と語るならば, そのようになるかもしれない。

*Ātmānam eva priyaṁ upāsita sa ya ātmānam eva priyaṁ upāste na hāsyā priyaṁ pramāyukaṁ bhavati*——この文句に関しては, 特に問題はない。*Upās* をスナールはここでは *considérer* と訳している。*Ātmānam eva priyaṁ upāsita* をスナールは *Il ne feut considérer comme cher que l'ātman (son soi)* と訳した。これに対して, ベートリンクは *Upās* を *verehren* と独訳した。この箇所をドイツセンは *Darum soll man den Ātman allein als teuer verehren*, マクス・ミュラーは *Let him worship the Self alone as dear* と訳した。人格ではなく, アートマンという名の抽象的な概念を崇拜するというのは, 実に奇妙である, とわたくしは言わざるを得ない。

**I, 4, 8 (訳)**——このアートマンは息子よりもいとしく, 財産よりもいとしく, この一切よりもいとしく, われわれの内部にある。他のものがアートマンよりもいとしいと語る人に対して, 人が「彼はいとしいものを失うであろう」と語るならば, そのようになるかもしれない。人はアートマンだけをいとしいものとして熱心に求めるべきである。アートマンだけをいとしいものとして熱心に求める人にとって, いとしいものは失われない。

**I, 4, 9**——*tad āhur yad brahmavidyayā sarvaṁ bhaviṣyanto manu-  
syā manyante | kim u tad brahmāved yasmāt sarvaṁ abhavad  
iti ||*

われわれはアートマンを考察して来たのに、突如としてブラフマンの知識 (*brahmavidyā*) という語と出会う。I, 4, 6 において、われわれは *brahmano 'tisrṣṭih* という語に遭遇した。ここでは、*brahmavidyā* という語が見いだされる——*tad āhur yad brahmavidyayā sarvaṃ bhaviṣyanto manuṣyā manyante*。I, 4, 9 は、I, 4, 10 に対する前奏曲にすぎないが、ここで、なぜ、*brahmavidyā* という語が使用されるかは一考に値する。*Ātmety evopāsita* という文句から、われわれが「熱心に求めること」の対象が全体的なもの、一つであるもの、あるいは同じことだが、この一切であることを知った。ブラフマンの知識 (*brahmavidyā*) の対象となるのもまた、全体的なもの・この一切である。

*Kim u tad brahmāved yasmāt sarvaṃ abhavad iti*——ここで注目に値するものは、*brahman* と *sarvaṃ* が同一の事物として解釈されていることである。少なくとも、ブラフマンがこの一切になることは確実である。われわれは、今や、アートマンの代わりにブラフマンについて検討を加えなければならない。万物に内在するアートマンと、全体的なもの・この一切としてのブラフマンとは、実質的に同一である。

**I, 4, 9 (訳)**——それに関して、人々は言う——「もしもブラフマンの知識によって一切になると人々が考えるならば、それが一切になったということによって、ブラフマンは何を知ったのであろうか？

**I, 4, 10**——*brahma vā idam agra āsīt tad ātmānam evāvet | ahaṃ brahmāsmīti | tasmāt tat sarvaṃ abhavad tad yo yo devānāṃ pratyabudhyata sa eva tad abhavad tatharṣiṇāṃ tathā manuṣyānāṃ tad adhaitat paśyann ṛṣir vāmadevaḥ pratipede 'haṃ manur abhavaṃ sūryaś ceti | tad idam apy etarhy ya evaṃ vedāhaṃ brahmāsmīti sa idam sarvaṃ bhavati tasya ha na devāś ca nābhūtyā īśate | ātmā hy eṣāṃ sa bhavati atha yo 'nyāṃ devatām upāste 'nyo 'sāv anyo 'haṃ asmīti na sa veda yathā paśur evaṃ sa devānāṃ | yathā ha vai bahavaḥ paśavo manuṣyaṃ bhuñjyur evaṃ ekaikaḥ puruṣo devān bhunakty ekasminn eva paśāv ādīyamāne 'priyaṃ bhavati kim u bahuṣu tasmād eṣāṃ*

tan na priyaṃ yad etan manuṣyā vidyuh ||

わたくしは、*ātmety evopāsita* という文句の重要性を、前の箇所では指摘した。この文句と並んで重要なのは、*ahaṃ brahmāsmi* という表現である。そして、*ahaṃ brahmāsmi* を *tat tvam asi* (お前がそれである) と並んで梵我一如 (ブラフマンとアートマンが一つであること) を示す大格言である、と人は言う。しかし、このような考えは果して正しいのであろうか？ この問題について、わたくしは考えてみたい。

さて、*braham vā idam agre āsīt tad ātmānam evāvet* という文句を検討しよう。まず最初に、*brahma vā idam agre āsīt* (実に、ここには最初ブラフマンが存在した) という文章に関して、われわれはこのブラフマンが世界の起源であると言える。しかるに、I, 4, 17 においては *ātmaivedam agra āsīt eka eva* という表現が見られる。いや、われわれは、I, 4, 1 の冒頭において *ātmaivedam agra āsīt puruṣavidhaḥ* という、アートマンに関する創造を扱って来た。I, 4, 11—15 まではブラフマンからの世界創造が説かれているが、それ以外においてはアートマンが話題になっている<sup>11)</sup>。われわれのウパニシャッド (I, 4) に関する限り、ブラフマンとアートマンの同一視 (梵我一如) が主題になっているのではなく、アートマンおよびブラフマンからの二つの異なった創造説が、それぞれ独立したテーマになっていると言える。

しかし、*tad ātmānam evāved* という表現、さらに *ahaṃ brahmāsmi* という表現は、梵我一如を説いていることは明白ではないのか？ ある人は人はこのように反論するかもしれない。しかし、*tad ātmānam evāvet* という文においては、*ātmānam* は再帰代名詞として使用されているのであり、形而上学的な原理を意味しない。「ブラフマンは自己自身だけを知った」と訳すべきであろう。*Ahaṃ brahmāsmi* という際の *ahaṃ* は決してアートマンを意味するものではない。*Ahaṃ* は経験的な自己、すなわち、「わたくし」である。この「わたくし」が無限に拡大されて一切の限定を突き破れば、「わたくし」はアートマンになり、ブラフマンになるのである。ここでは、「わたくし」はブラフマンを指す。「わたくしはすべてである、とこのように人は熱心に求めるべきである」(ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド, 2, 21, 4)。*Ahaṃ brahmāsmi* のなかに、



われわれは梵我一如, あるいはブラフマンとアートマンの同一視を見いだすことは出来ない。「実に, ここには最初ブラフマンが存在していた」のであり, アートマンの存在する余地は全然ない。 *Brahma vā idam agra āsīt tad ātmānam evāvet | ahaṃ brahmāsmīti*——実に, ここには最初ブラフマンが存在していた。それは, 「わたくしはラフマンである」とこのように自己自身だけを知った。

さて, *brahmavidyayā sarvaṃ bhaviṣyanto* という文句に対応するのは, *tasmāt tat sarvaṃ abhavat* である。Tasmāt (それから, それによって) というのは, ブラフマンの知識 (=わたくしはブラフマンであるという認識) と必然的な関連をもっている。人はブラフマンを知る (=自己自身を, ブラフマンであると知る) ことによって「その一切」になるのである——*tasmāt tat sarvaṃ abhavat* (それによって, その一切が生じた)。

*Tad yo yo devānāṃ pratyabudhyata sa eva tad abhavat tathar-  
śiṇāṃ tathā manuṣyānāṃ tad dhaitat paśyann ṛṣir vāmadevaḥ  
pratipede 'haṃ manur abhavaṃ sūryaś ceti*——Pratibudh と Bhū は *brahmavidyā* と *sarvaṃ Bhū* に対応すると考えていい。

*Tad idam apy etarhy ya evaṃ vedāhaṃ brahmāsmīti sa idam  
sarvaṃ bhavati* tasya ha na devāś ca nābhūtyā īśate というテキストに関して, わたくしは *brahmavidyā* によって人はこの一切になるという思想が繰り返されていることに気づくのである。

しかるに, われわれは I, 4, 10 において主題がブラフマンからふたたびアートマンに転換するのに注目せざるを得ない。アートマンとの関連において *Upās* が言及されている——*ātmā hy eṣāṃ sa bhavati atha yo  
'nyāṃ devatām upāste 'nyo śāv anyo 'haṃ asmīti na sa veda yathā  
paśur evaṃ sa devānāṃ*。 *Upās* の対象は全体的なもの, あるいは「この一切」である。I, 4, 10 の最後の文章については特に検討する必要を認めないゆえ省略する。

**I, 4, 10 (訳)**——実に, ここには最初ブラフマンが存在していた。それは, 「わたくしはブラフマンである」とこのように自己自身だけを知った。それ (=ブラフマンの知識) によって, その一切が生じた。それゆ

え、神々のなかで目覚めたものは、まさにそれになった。聖仙もそうであった。人間もそうであった。これを見て、ヴァースデーヴァ仙は、「わたくしはマヌであった」、「わたくしは太陽であった」と理解したのであった。現在においても、「わたくしはブラフマンである」とこのように知っている人は、この一切になる。そして、神々でさえ、それを防げることは出来ない。なぜなら、彼はこれらの神々のアートマン（自己）であるから。「彼はこれである」、「わたくしはあれである」と言って他の神格を熱心に求める人は知らない。彼は神々の家畜であるようなものである。実に多くの家畜が人間の役に立っているように、個々の人間も神々の役に立つのである。一頭の家畜が（虎などによって）奪い去られれば、それは不快である。まして、多くの家畜が奪い去られればなおさらである。それゆえ、人間がこれ（＝ブラフマン）を知るのは、これらの神々にとって愉快ではない。

I, 4, 11—brahma vā idam agra āsīd ekam eva tad ekam san na vyabhavat | tac chreyo rūpam atyasrjata kṣatrrm yāny etāni devatrā kṣatrāṇindro varuṇaḥ somo rudraḥ parjanya yamo mṛtyur īśāna iti | tasmāt kṣatrāt paraṁ nāsti tasmād brahmanāḥ kṣatriyam adhastād upāste rājasūye kṣatra eva tad yaśo dadhāti saiṣā kṣatrasya yonir yad brahma | tasmād yady api rājā paramatām gacchati brahmaivāntata upaniśrayati svām yonim ya u enam hinasti svām sa yonim ṛcchati sa pāpīyān bhavati yathā śreyāṁsam himsivā ||

Brahma vā idam agra āsīd ekam eva——実に、ここには最初ブラフマンだけが存在していた。この文句は、*ātmaivedam agra āsīt* ということばをわれわれに連想させる。しかし、*brahma vā idam agra āsīt* は *ātmaivedam agra āsīt* とは違っている。「実に、ここには最初ブラフマンだけが存在していた」という際、ブラフマンという語によって意味されるのは中性的な原理というよりも、むしろバラモン階級であるからである。ブラフマン（＝バラモン）の優位がここで強調されている。そして、最初、ここにはブラフマン（＝バラモン）階級だけが存在したというわけである。

**Tad ekam san na vyabhavat** (それはただ一つであったので開展しなかった)——この文句は、たった今わたくしが述べたことを示唆する。マイトラヤナ・サンヒター, 4, 4, 9 によれば、ブラフマンは開展する——**brahma vai yad agre vyabhavat**……しかし、われわれのウパニシャッドの当該箇所においては、ブラフマンは *Vi-bhū* することはなかった。しかし、一つ (*eka*) であるものが、まさに一つであるからといって開展しないということはない。リグ・ヴェーダ, 8, 58, 2 によれば、一つであるものは開展したからである——**ékam vā idám ví babhūva sárvam** (実に、一つであるものはこのすべてに開展した)。それでは、当該箇所では、なぜ、ブラフマンは開展しなかったのであろうか？ それ（バラモン階級）以外に、まだ他の階級が存在しなかったからである。ターンデヤマハー・ブラーフマナ, 11, 1, 2 には **brahma hi pūrvam kṣatrāt** という文句が見いだされる。この場合 **brahman** と称せられるのは、もちろん、バラモン階級 (**brāhmaṇajāti**) である。バラモン階級の存在する以前にはクシャトリヤ階級は存在しなかった、あるいはクシャトリヤ階級の存在する前にバラモン階級が存在した、ということをわれわれは念頭に置かねばならない。そして、われわれは、ブラフマン (=バラモン階級) がクシャトラ (=クシャトリヤ階級) を創造するというテキストの説明を、以下において試みなければならない。

**Tac chreyo rūpam atyasrjata kṣatram yāny etāni devatrā kṣatrāṇindro varuṇaḥ somo rudraḥ parjanya yamo mṛtyur īśāna iti——atisrj** というのは、みずからよりも優れたものを創造することである。死すべき存在としてのアートマンが不死なる神々を創造したことを、われわれは **atisrṣṭi** と称した。**Tac chreyo rūpam atyasrjata kṣatram** という際、わたくしはジャイミニヤ・ブラーフマナ, 2, 32 の **brahma vai kṣatrāj jyāyāḥ** という文句を思い出す。ブラフマンはクシャトラよりも古く、しかも優れているという思想がここに見いだされる。しかし、われわれのウパニシャッドにおいては、ブラフマンはクシャトラよりも古いことは認められているけれども、クシャトラはバラモンよりも「優れた形態」であり、ブラフマンはみずからも超えてクシャトラを **atisrj** しなければならなかった。しかし、クシャトラはブラフマンよりも、なぜ、優れているのであろうか？ それは、クシャトリヤ階級が権力を保持していた

からである——*tasmāt kṣatrāt paraṃ nāsti* (それゆえ、クシャトラよりも高いものは存在しない)。

われわれは、ブラフマン (=バラモン) とクシャトラ (=クシャトリヤ) の関係について次のようなことを知っている——*tasmād brahmaṇaḥ kṣatriyam adhastād upāste rājasūye kṣatra eva tad yaśo dadhāti saiśa kṣatrasya yonir yad brahma*. *Tasmād brahmaṇaḥ kṣatriyam adhastād upāste* という文句に対応するテキストは、シャタパタ・ブラーフマナ, 1, 3, 4, 15 に見いだされる——*tasmād upary āsinaṃ kṣatriyam adhastād imā prajā upāste*. シャタパタ・ブラーフマナにおいては、下にいるこれらの生類が彼らの上に坐っているクシャトリヤを熱心に求めることが意味されている。われわれのウパニシャッドに関しても、同じように解釈することが出来よう——「それゆえ、バラモンはクシャトリヤの下に坐って、熱心に彼らを求める」と。*Upās* は「崇拝する」ことではなく、「言い寄る」、「せがむ」、「機嫌を取る」などという意味であり、そこには何かを求め、目的を達しようという努力・志向が認められる。

*Rājasūye kṣatra eva tad yaśo dadhāti saiśa kṣatrasya yonir yad brahma*——*Rājasūye* は *upāste* と結合する。つまり、ラージャスーヤ祭において、バラモンはクシャトリヤの下に坐って、熱心に彼らを求める。*Rājasūya* は、王の戴冠式の際に行なわれる大規模な祭祀である。それは、王の即位式的一种である。クシャトリヤとバラモンの関係は、相互依存、互惠のそれである。両者は相互に助け合う。バラモンはクシャトリヤに名声を与えるが、みずからをクシャトリヤ(権力)の母胎であると称する——*kṣatra eva tad yaśo dadhāti saiśa kṣatrasya yonir yad brahma* (彼は、まさにクシャトラにその名声を与える。しかし、ブラマン (=バラモン) は権力 (=クシャトラ) の母胎である)。

*Tasmād yady api rājā paramatām gacchati brahmaivāntata upaniśrayati svām yonim*——この文章で重要なのは *upaniśrayati* という表現である。このことばに果して「帰依する」というような情緒的なニュアンスがあるか否かが検討されねばならない。シャンカラは、*upaniśrayati* を *āśrayati* と注釈している。また、ドイッセンは、*brahmaivāntata upaniśrayati svām yonim* を *so nimmt er doch am Ende seine Zuflucht zum Brahman als zu seinem Mutterschoß* と訳している。シャンカラ

およびドイッセンの解釈に基づく限り、われわれは *Upaniśri* を「帰依する」、「……に庇護を求める」という意味に取ることが出来る。しかしながら、私見によれば、*Upaniśri* には情緒的な要素は混入していない。シャーンカーヤナ・ブラーフマナ, 9, 4 には、*sa prācyam dakṣiṇasya havir-dhānasya uttaram vartmopaniśrayeta* という文句がある。また、シャタパタ・ブラーフマナ, 3, 1, 2, 17 には *tasmād u gāvaḥ suvāsam upaivaniśrayante* という文句がある。両方とも、「帰依する」という意味はない。ベートリンク・ロートの『ペテルスブルク大辞典』によれば、*Upaniśri* (能動態) は *in die Nähe ziehen, an die Seite setzen* である。アルブレヒト・ヴェーバーによれば<sup>12)</sup>、*brahmaivāntata upaniśrayati* は *schließlich wendet er sich doch wieder an das brahman* と訳される。*Upaniśri* は、無造作に「近づく」と訳してよい。

Ya u enaṃ hinasti svām sa yonim ṛcchati sa pāpiyān bhavati yathā śreyāṃsaṃ himhitvā——この文句に関しては、特に文法上の問題はない。ただ、*ṛcchati* がここでは *hinasti* という意味であるこれを指摘するにとどめよう。

**I, 4, 11 (訳)**——実に、ここには最初ブラフマンだけが存在していた。それはただ一つであったので展開しなかった。それは、より優れた形態、すなわち、クシャトラ（権力）を超創造した。すなわち、神々の間ではインドラ、ヴァルナ、ソーマ、パルジャニヤ、ヤマ、ムリティユ、イーシャーが、これらのクシャトラである。それゆえ、クシャトラよりも高いものは存在しない。それゆえ、ラージャスーヤ祭において、バラモンはクシャトリヤの下に坐って、熱心に彼らを求めるのである。彼（バラモン）はまさにクシャトラにその名声を与える。しかし、ブラフマン（＝バラモン）はクシャトラの母胎である。それゆえ、たとい王が最高の位に達するとしても、王は最後には自己の母胎としてのブラフマンに近づく。そして、この母胎を傷つける人は、自己の母胎を傷つける。自己よりも、優れたものを傷つけたのだから、彼は一層悪くなる。

**I, 4, 12**——*sa naiva vyabhavat sa viśam asṛjata yāny etāni deva-jātāni gaṇaśa ākhyāyante vasavo rudrā ādityā viśvedevā maruta*

iti ||

**I, 4, 12 (訳)**——それ(＝ブラフマン)は開展しなかった。それはヴィシュ(庶民階級)を創造した。これらの神族は、ヴァス、ルドラ、アーディテヤ、ヴィシュヴェー・デーヴァーハ(一切神)、およびマルトというふうにグループで数えられる。

**I, 4, 13**——sa naiva vyabhavat sa śaudraṃ varṇam asṛjata pūṣa-  
nam iyaṃ vai pūṣeyaṃ hidaṃ sarvaṃ puṣyati yad idaṃ kiñ ca ||

Śaudraṃ varṇam という表現に関して、一言だけ述べよう。Śaudra は śūdra から派生した語である。われわれは、ブラフマン(バラモン)、クシャトラ(クシャトリヤ)、ヴィシュに次いで、ここでインド社会の最下層としての śūdra という語に出会うわけである。ヴァルナ(varṇa)は、元来、「色」を意味する語であり、「階級」ないし「階層」を意味する。Varṇa はカーストを意味したことはなかったし、またそれを意味しない。カーストを意味するサンスクリットは jāti である。Jāti は varṇa の内部の社会的集団である。この社会的集団には次のような三つの特徴がある。同族結婚、食事を共にすること、および排他的な職業独占が、すなわち、それである。しかし、われわれのウパニシャッドには、このような特徴はまだ存在しない。当該箇所においては、Varṇa は「階級」を意味するのであって、カースト(jāti)を意味するのではない。

**I, 4, 13 (訳)**——それは開展しなかった。それはシュードラ(賤民)の階級、すなわち、プーシャンを創造した。実に、プーシャンは、この大地である。なぜなら、大地はここに存在するこの一切を養うから。

**I, 4, 14**——sa naiva vyabhavat tac chreyorūpam atyasṛjata dharmaṃ tad etat kṣatrasya ksatraṃ yad dharmas tasmād dharmāt param nāsty atho abalīyān baliyāṃsam āśaṃsate dharmeṇa yathā rājñaiṣaṃ yo vai sa dharmāḥ satyaṃ vai tat tasmāt satyaṃ vadantam āhur dharmāṃ vadatīti dharmāṃ vā vadantam satyaṃ



vadatīty etad dhy evaitad ubhayaṃ bhavati ||

Sa naiva vyabhavat tac chreyorūpam atyasrjata *dharmam* tat etat kṣatrasya kṣatram yad dharmas——このテキストでわれわれの興味をそそるのは *dharma* という概念である。ブラーフマナ文献に関する限り、*dharma* は祭祀に関する義務を意味することが多い。しかし、インド思想史においては、*dharma* は宗教、道徳、および法がまだ区別されていない状態の生活規範と解釈することが出来る<sup>18)</sup>。しかし、*dharma* が *kṣatrasya kṣatra* であるという表現から判断すれば、われわれは *dharma* をここでは「法」と訳してもいいのではなかろうか？ *Tat etat kṣatrasya kṣatram yad dharmas* という文句と関連して、あるいは人はここで王権が絶対であることが示唆されていると言うかもしれない。しかし、このような解釈は *tasmād param nāsti* という、その直後に来る文句によって直ちに否定される。クシャトラ（権力）の上にダルマ（＝法）が存在することを、われわれのウパニシャッドは強調している。*Kṣatrasya kṣatram* というのは、ダルマがクシャトラ（権力）よりも上に立つことを示す文句である。シャンカラは *kṣatrasya kṣatram* について、次のように注釈している——*kṣatrasyāpi niyantr ugrād apy ugram*, と。クシャトラがたとえ強大であっても、ダルマはそれをチェックするものとして、それよりも強大である——シャンカラはこのように考えたのである。クシャトラとダルマの関係について、われわれのテキストは、非常に興味深い記述をしている。

Atho abaliyāḥ baliyāṃsam āśaṃsate dharmena yathaiva rājñaivaṃ  
このテキストに関して、わたくしは *āśaṃsate* という語が重要な意味をもっていると思う。この語を、ヒレブランドは「告訴する」、「法庭に訴える」という法律用語として解釈した。しかし、ここで問題になるのは、*āśaṃs* が法律用語であるか否かではなく、この語が *yathaiva rājñā* とどのように接続するかである。*Āśaṃsate dharmena yathaiva rājñā* という場合、われわれは「王による如く、法によって……することを期待する」というふうに訳すことが出来る。スナール、ベートリンク、ドイッセン、マクス・ミュラー、ヒレブランドなどは、このように翻訳している。*Atho abaliyāṇ baliyāṃsam āśaṃsate dharmena yathā rajñā* をドイッ

センは *Daher auch der Schwächere gegen der Stärkeren seine Hoffnung setzt auf das Recht, gleich wie auf einen König* と訳している。しかし、わたくしは *yathā rājñā* を独立の構文とみなし、この文句を *Āśams* に直結しない。*Yathā rājñā* を、わたくしは「日常生活において家長が王と争うように」と解釈する。この解釈は、ジャンカラの注釈に基づくものである。ジャンカラは次のように注釈している——*yathā loke sarvabalavattam enāpi kuṭumbika*, と。もしも、ドイッセンの訳を認めれば、われわれはダルマをクシャトラと並べて、すなわち、クシャトラと同格のものとして承認しなければならない。しかし、ダルマよりも優れたものは存在しないというのが古代インドのダルマ観である——*dharmāt param nāsti*。王権といえども、ダルマの支配を受けねばならない。

*Atho abaliyān baliyāṃsam āśamsate dharmeṇa* という思想は極めて興味深い。しかし、もっと興味深いのは、われわれのウパニシャッドにおいてダルマが真理と同一視されることであろう。しかし、ダルマと真理が同一であるというのは、実質的には何を意味するのであるのか？ われわれのウパニシャッドは次のように言う——*yo vai sa dharmah satyaṃ vai tat tasmāt satyaṃ vadantam āhur dharmam vedatīti dharmam vā vadantam satyaṃ vadantīty etad dhy evaitad ubhayaṃ bhavati*。上のテキストは次のような意味である——実にダルマであるものは、実に真理である。それゆえ、真理を語る人のことを、人々は「彼はダルマを語る」と言う。実にダルマを語る人のことを、人々は「彼は真理を語る」という。なぜなら、両者はまさしく同一であるから。

ここでは、ダルマは正義を意味するのか？ わたくしは、このような考えに対して否定的である。なぜなら、正義の実際の目標は平等であるから。ヴァルナ（階級）の正当化を図るわれわれのウパニシャッドが平等を目指すことはあり得ない。真理 (*satya*) には形而上学的な意味はない。*Satya* は最高の実在、あるいは絶対的なものとは何のかかわり合いもない。オルデンベルクが『ブラーフマナ文献の世界観』(1919 年。181 ページ) のなかで述べているように、*satya* は「人間のことが信頼に値すること」、および「人間が約束を守ること」を意味する。ブラーフマナ文献だけでなく、われわれが目下扱っている当該箇所においても、オルデンベルクの

「真理」についての解釈は通用する。この意味で、法 (dharma) と真理は極めて密接な関係にある。しかし、今日的な立場から考察すれば、法と真理とは決して同一ではない (Jhering, *Der Zweck im Recht*, Vol. 2., 6-8, Auflage, 1923, 465 ページ以下参照) が、法を含めて、われわれの全生活が人間のことばの信頼性に依存することは否定出来ない事実である。人間のことが信頼出来るという大前提の上に人間社会の秩序と平和が保障されている。そして「真理」というのは、まさしく「人間のことが信頼に値いすること」であり、人間が誠実に「約束を守ること」である。もしもこの二つが崩壊すれば、人間社会にはダルマは存在しなくなってしまうであろう。社会の存続という目的のためには、人は真理を語らねばならない。しかるに、社会の存続がダルマの目的である。従って、真理と法の間には密接な関係が存在する——わたくしは、このように解釈する。

**I, 4, 14 (訳)**——彼は開展しなかった。それは、より優れた形態、すなわち、ダルマ (法) を超創造した。ダルマは、クシャトラのクシャトラである。それゆえ、ダルマよりも高いものは存在しない。より力の弱い人でさえ、王と争っている人のように、このように、より力の強い人を法の力によって (打ち負かすことを) 望む。実にダルマであるものは、実に真理である。それゆえ、真理を語る人のことを、人々は「彼はダルマを語る」と言う。実にダルマを語る人のことを、人々は「彼は真理を語る」と言う。なぜなら、両者はまさしく同一であるから。

**I, 4, 15**——tad etad brahma kṣatram viṭ sūdras tad agninaiva deveṣu brahmābhavad brāhmaṇo manuṣyeṣu kṣatriyeṇa kṣatriyo vaiśyena vaiśyaḥ sūdreṇa sūdras tasmād agnāu eva deveṣu lokam icchante brāhmaṇe manuṣyeṣv etābhyāṃ hi rūpābhyāṃ brahmābhavat | atha yo ha vā asmāl lokāt svaṃ lokam adṛṣtvā praiti sa enam avidito na bhunakti yathā devo vedo vā 'nanukto 'nyad vā karmākṛtaṃ yad iha vā apy anevaṃvin mahat puṇyaṃ karma karoti tad dhāsyāntataḥ kṣiyata eva 'tmānam eva lokam upāsita sa ya ātmānam eva lokam upāste na hāsy karma kṣiyate | asmād dhy eva 'tmano yad yat kāmāyate tat tat srjate ||

どのようにして四つの階級が成立するかを、われわれは見て来た。われわれのウパニシャッドは、次のように述べている——*tad etad brahma kṣatram viṭ śūdras*——それゆえ、これがブラフマン、クシャトラ、ヴィシュ、およびシュードラ（という四つの階級）である、と。四つの階級と神々の関係について、次のように言われる——*tad agninaiva deveṣu brahmābhavad brāhmaṇo manuṣyeṣu kṣatriyeṇa kṣatriyo vaiśyena vaiśyaḥ śūdreṇa tasmād agnāu eva deveṣu lokam icchante brāhmaṇe manuṣyesu etābhyām hi rūpābhyām brahmābhavat*——それゆえ、神々の間では、ブラフマンは火として、人間の間では、それはバラモンとして存在した。クシャトリヤはクシャトリヤとして、ヴァイシュヤはヴァイシュヤとして、シュードラはシュードラとして存在した。それゆえ、人々は火のなかに神々の間における世界を、ブラフマンのなかに人間の間における世界を求めた。なぜなら、それ（ブラフマン）は二つの形態（火とバラモン）として生じたからである。

*Atha yo ha vā asmāt lokāt svam lokam adṛṣtvā praiti sa enam avidito na bhunakti yathā devo vedo vā 'nanukto 'nyad vā karmakṛtaṃ*——スナールは *svam lokam* を *sa place [future]*、マクス・ミュラーは *his true future life* と訳している。これに対して、ベートリンクはこれを *seine Stätte*、ドイッセンは *eigene Welte* と訳している。しかしながら、*svam lokam* には *future life* という意味はない。*Svam lokam* は、自己の未来に行くべき世界ではない。死後の世界、あるいは来世については、ここで全然触れられていない。「この世」に対応して「あの世」が存在するという考えは、確かにウパニシャッドに散見する。しかも、ここでは *asmāt lokāt svam lokam adṛṣtvā praiti* という脈絡であるから、*svam lokam* を「来世」と解釈するのも一理ある。しかし、ここでは *loka* は「場所」を意味する。オランダのインド学者ゴンダは、この *loka* を *Lebenskreis, Lebensfeld* と解釈している<sup>14)</sup>。わたくしは、*loka* を「生活領域」と訳すのがもっとも適切であると思う。*Loka* は決して人が死んだ後に行く世界、すなわち、来世でもなければ本来の世界でもなく、現在の自己の生活の場である。

*Yad iha vā apy anevamvin mahat puṇyaṃ karma karoti tad dhāsyāntataḥ kṣīyata eva*——実に、このように知らない人がここで大

いなる善行を行なうとしても、それは最後には尽きる。 *Ātmānam eva lokam upāsita sa ya ātmānam eva lokam upāste na hāsyā karma kṣīyate*——人はアートマンだけを（自己の）生活領域として熱心に求めるべきである。アートマンだけを生活領域として熱心に求める人の行為は尽きない。ここで重要なのは、 *ātmānam eva lokam upāsita* という文句である。I, 4, 7 において、われわれは *ātmety evopāsita* という表現に出会った。アートマンが自己の生活領域であるという思想については、間もなく論じる予定である。いずれにせよ、人はアートマンだけを生活領域として熱心に求めねばならない。そうすれば、彼の行為が減することはない。彼の行為が減することがないというのは、決して来世における自己の功德の結果（＝果報）が尽きないということではない。ここで意味されているのは、自己の生活領域としてのアートマンは尽きることがないということである。「アートマンだけを生活領域として熱心に求める人の行為は尽きない」と述べてから、われわれのウパニシャッドはその理由について次のように言っている——*asmād dhy eva 'tmano yad yat kāmāyate tat tat sṛjate*, と。アートマンは、結局、創造者である。この世から自己の生活領域を見ないで去る人はみじめである。なぜであろうか？ 彼はアートマンを自己の生活領域として熱心に求めることをしないからである。しかし、アートマンが自己の生活領域であるというのはどういうことか？ アートマンは創造者である！ 創造的な生活をしないでこの世を去る人には災いあれ！ われわれは *asmād dhy eva 'tmano yad yat kāmāyate tat tat sṛjate* を「なぜなら、人はこのアートマンから、彼が欲するものは何であれ創造するから」と訳していいであろう。アートマンは「生活の場」、あるいは「生活領域」である。人は、この生活の場から、自己の欲するものは何であれ創造する。しかも、アートマンからの創造は来世においてではなく、今ここで行なわれる。

**I, 4, 15 (訳)**——それゆえ、これがブラフマン、クシャトラ、ヴィシュ、およびシュードラ（という四つの階級）である。それゆえ、神々の間でブラフマンは火として、人間の間では、それはバラモンとして存在した。クシャトリヤはクシャトリヤとして、ヴァイシュヤはヴァイシュヤとして、シュードラはシュードラとして存在した。それゆえ、人々は火



のなかに神々の間における世界を、ブラフマンのなかに人間の間における世界を求める。しかし、実に自己の生活領域を見ないでこの世を去る人にはそれは知られていないので、それは彼の役には立たない。それは実に、ヴェーダが読誦されず、あるいはほかの祭祀の行為がなされないようなものである。実に、このように知らない人がここで大いなる善行を行なうとしても、それは最後には尽きる。人はアートマンだけを（自己の）生活領域として熱心に求めるべきである。アートマンだけを生活領域として熱心に求める人の行為は尽きない。なぜなら、人はこのアートマンから、彼が欲するものは何であれ創造するからである。

**I, 4, 16**—*atho ayam vā ātmā sarveṣāṃ bhūtānāṃ lokāḥ sa yaj juhōti yad yajate tena devānāṃ loko 'tha yad anubrūte tena ṛṣīnāṃ atha yat pitṛbhyo nīṣṇāti yat prajāṃ icchate tena pitṛnāṃ atha yan manuṣyān vāsayate yad ebhyo 'śanaṃ dadāti tena manuṣyānāṃ atha yat paśubhyas tṛṇodakaṃ vindati tena paśūnāṃ yad asya gr̥heṣu śvāpadā vayāṃsy ā pipīlikābhya upajīvanti tena teṣāṃ loko yathā ha vai svāya lokāyāriṣṭim icched evaṃ ha-ivaṃvide sarvāṇi bhūtāny ariṣṭim icchanti tad vā etad vidiṭaṃ mīmāṃsitam ||*

今や、われわれはブラフマンからふたたびアートマンへ戻る。しかし、ここで、われわれは *ātmānam eva lokam upāsita* ということを追求する。アートマンが自己の生活の場・生活領域であるというのは、どういう意味であろうか？ この問いに対して、われわれのウパニシャッドは次のように答える——*atho ayam vā ātmā sarveṣāṃ bhūtānāṃ lokāḥ*. 生きとし生けるもの・生類にとって、アートマンは生活領域である。このアートマンは、生類が死後おもむく来世という名の世界ではない。それは、彼らが日々生活をする場である。それゆえ、わたくしは *atho…… lokāḥ* を、「さて実に、このアートマンは一切の生類の生活領域である」と訳した。*Svaṃ lokam* を *his true future life* と訳したマクス・ミュラーも、*sarveṣāṃ bhūtānāṃ lokāḥ* を *the world of all creatures* と訳さざるを得なかった。ベートリンクは、ここでは *loka* を *die Stätte*, ド



イッセンは *eine Wohnstätte* と訳した。シャンカラは *loka* に関して *sarveṣāṃ devādīnāṃ pipīlikāntānāṃ bhūtānāṃ loko bhogya ātmety arthaḥ* と注釈している。

**Sa yaj juhōti yad yajate tena devānāṃ loko**——人が供物を捧げ、祭ることによって、それは神々の生活領域になる。「人」とは誰のことか？ゲルダー女史は、ここでは人間とアートマンとは同一であると考えている<sup>15)</sup>。アートマンと祭祀を行なう人間が異なっていないことを、ゲルダー女史は力説する。アートマン自身が人間として供物を捧げ、祭りを行なう、と女史は言う。そして、その行為によって、アートマンは神々の生活領域になるというわけである。アートマンが同時に人間であるということ、われわれはここで思い出すべきであろう。アートマンは人間の形をしている、というのが、われわれのウパニシャッドの I, 4, 1 の冒頭の文句である。しかも、このアートマンは死すべき存在である。

**Atha yad anubrūte tena ṛṣīnām**——次いで、彼が読誦することによって、それは聖仙のそれになる。この文句には、特に問題はない。**Atha yat pitṛbhyo nīṣṇāti yat prajāṃ icchate tena pitṛnām**——次いで、祖先に（団子や水などを）捧げ、子孫を求めることによって、それは祖先のそれになる。**Atha yan manuṣyān vāsayate yad ebhyo 'śanam dadāti tena manuṣyānām**——次いで、人間を宿泊させ、彼らに食物を与えることによって、それは人間のそれとなる。神々、聖仙、祖先、人間の次に、家畜について、われわれのウパニシャッドは語る——**atha yat paśubhyas tṛṇodakam vindati tena paśūnām yad asya gṛheṣu śvapadā vapāṃsyā pipīlikābhyā upajīvanti tena teṣāṃ loko**——次いで、彼が家畜のために草と水を見いだす（獲得する）ことによって、それは家畜のそれになり、猛獣、鳥、および蟻に至るまで彼の家において生活を維持することによって、それは彼らの生活領域になる。

『マヌの法典』(3, 70) における五大祭とは異なった意味で、ここでは五大祭祀が説かれている。神々、聖仙、祖先、人間、および動物に対する奉仕がここでは言及されている。神々から始まって動物に終わる、これらの生類に対する奉仕は、インド的な意味でのヒューマニズムと言えるかもしれない。アートマンが彼らの「生活領域」であるというのは、彼らが（人間としての資格における）アートマンの行なう奉仕によってみずから

の生活を維持するからである。人間は宿舎を提供され、食物を供給されることによって初めて「生活領域」を自己のものにする。自己の生活領域を見ないでこの世を去る人はみじめである！ つまり、宿舎も食物も提供されないで死去する人はみじめである。この世に棲む日々を、人は宿泊し、食物を食べて生きて生かねばならない。あの世は、人間の生活領域とは何の関係もない。動物の場合にも事情は同じである。アトマンが知識を有する人間にとって、なぜ、唯一の価値ある「生活領域」であるか、という問いに対して、われわれのウパニシャッドは次のように答える。

*Yathā ha vai svāya lokāyāriṣṭim icched evaṃ haivamvide sarvāṇi bhūtāny ariṣṭim icchanti tad vā etad viditaṃ mīmāṃsitam*。カウシータキ・ウパニシャッド, 2, 11 には, *yena prajāpatiḥ prajāḥ paryagrhnāt tadarīṣṭyai* という文句がある。*Ariṣṭi* は「傷つけられないこと」を意味し、害されない状態、すなわち、「安全」という意味で使用される。シャタパタ・ブラーフマナ, 11, 5, 4, 4 に次のような文句がある——*viśvebhyas tvā bhūtebhyaḥ pāradadāmy ariṣṭyā 'iti tad enaṃ sarvebhyo bhūtebhyaḥ paridadāty ariṣṭyai tathā hāsyā brachmacārī na kām canārtim ārcchatī na sa ya evaṃ veda*。ここで *ariṣṭi* と言われているのは、「傷害からの安全」を意味する。われわれのウパニシャッドにおいては、傷つけられるのは恐い、安全な場所が欲しい、という思想が見いだされる<sup>10)</sup>。そして、自己の生活領域は、まさに傷害からの安全を保証された場所でなければならない。しかし、安全な場所を求めるということは、危険に身をさらすことを避けることである。ここに、ウパニシャッドの基本的な姿勢の一つが見られる。当該箇所を、わたくしは次のように訳す——実に人が自己の生活領域に対して（傷害からの）安全を望むように、一切の存在はこのように知っている人に対して（傷害からの）安全を望む。実に、このことはすでに知られているのであり、検討済みである、と。

たった今わたくしの訳したテキストについて、若干の補足をしよう。……*haivamvide* という語の次ぎに、マーデヤンデナ版では *sarvadā* という語が付加される。*Ariṣṭi* をドイッセンは *Wohlfahrt* と訳しているが、*ariṣṭi* に関する限り、幸福とか安寧とかいうのは派生的な意味である。*Ariṣṭa* は、元来、*free from harm* を意味する。ターンデヤマハー・ブ

ラーフマナ, 12, 5, 23 の最後に *ariṣṭam antataḥ kriyate* という文句が見いだされるが, サーヤナの注によれば, *ariṣṭi* は *ahimsā* を意味する。傷害からの自由, 傷害からの安全が *ariṣṭi* である。スナールは *ariṣṭi* を *sécurité* と訳しているが, これは正しい言語感情に基づく訳である。ヒレブランドのこの語に対する訳語は *Heil* である。*Tad vā* は *tad vai* と読むべきである。このことは, サンスクリットの音韻の法則によって明らかである。*Vṛddhi* 母音である *ai* は, 通常, 母音 (あるいは重母音) の前で *ā* になる。例えば, *tasmai adāt* は *tasmā adāt*, *śriyai arthaḥ* は *śriyā arthaḥ* になる。われわれのウパニシャッドにおいては, *tad vā etad viditaṃ mīmāṃsitaṃ* は, 音韻的には *tad vai etad……* と復原することが出来る。

**I, 4, 16 (訳)**——さて, 実にこのアートマンは一切の存在しているものの生活領域である。人が供儀を捧げ, 祭ることによって, それは神々の生活領域になる。次いで, 人が読誦することによって, それは聖仙のそれになり, 次いで, 人が祖先に (団子や水などを) 捧げることによって, 子孫を望むことによって, それは祖先のそれになり, 次いで, 人が人間を宿泊させ, 彼らに食物を与えることによって, それは人間のそれになり, 次いで, 人が家畜のために草と水を獲得することによって, それは家畜のそれになり, 猛獣, 鳥, および蟻に至るまでその人の家において生活を維持することによって, それは彼らの生活領域になる。実に人が自己の生活領域に対して (傷害からの) 安全を望むように, 一切の存在はこのように知っている人に対して, (彼の) 安全を望む。実に, このことはすでに知られているのであり, 検討済みである。

**I, 4, 17**——*ātmaivedam agra āsīd eka eva so 'kāmayata jāyā me syād atha prajāyeyātha vittaṃ me syād atha karma kurvīyety etāvān vai kāmo necchāṃs canāto bhūyo vindet tasmād apy etarhy ekākī kāmayate jāyā me syād atha prajāyeyātha vittaṃ me syād atha karma kurvīyeti sa yāvād apy eteṣāṃ ekaikam na prāpnoty akṛtsna eva tāvan manyate tasya kṛtsnatā mana evāśya 'tmā vāg jāyā prāṇaḥ prajā cakṣur mānuṣaṃ vittaṃ caksuṣā hi tad vindate*

śrotram daivam śrotreṇa hi tac chṛṇoty ātmaivāśya karma 'tmanā  
hi karma karoti sa eṣa pāṅkto yajñah pāṅktaḥ paśuḥ pāṅktaḥ  
puruṣaḥ pāṅktam idaṃ sarvaṃ yad idaṃ kiñ ca tad idaṃ sarvaṃ  
āpnoti ya evaṃ veda ॥

**Ātmaivedam agra āsīd eka eva**——この文句は、われわれに I, 4, 1 の冒頭のことばを思い出させる。われわれは、ふたたびこの冒頭へ戻るのではないか、という印象を抑制するのがむずかしい。すでに、I, 4, 3 において、われわれはアートマンが自己自身を二つの部分に分割したことを知っている。アートマンは夫と妻となり、この一対から人類が生じたのであった。蟻に至るまで一対をなすものは、人類の創造に準じたのである。ブラーフマナ文献においては、プラジャーパティ（生類の主）がその配偶者である「ことば」(Vāc) の助けを借りて世界を創造するという思想が一般的である（例えば、ターンデヤマハー・ブラーフマナ, 20, 14, 2 参照）。われわれのウパニシャッドにおいては、プラジャーパティの代わりにアートマンが登場する。しかし、わたくしはアートマンのなかにプラジャーパティの影を感じる。アートマンとその妻のセックスによって人類から蟻に至るまで一対をなすものが創造されたが、このアートマンは実は「心」(manas) である、という思想が当該箇所に見いだされる。しかし、シャタパタ・ブラーフマナ, 6, 1, 2, 6 によれば、プラジャーパティは心 (manas) としてことばとセックスを行なう: *sa manasā vācam mithunaṃ sambhavat*. われわれは、アートマン（心）がその配偶者としての「ことば」の助けを借りて創造を行なうという考えを重視しなければならないであろう<sup>17)</sup>。われわれは、アートマン（心）とことばがどのようにして創造を行なったかについて一瞥したいと思う。

**So 'kāmayata jāyā me syād atha prajāyeya**——まず、この文句を検討しよう。So 'kāmayata……という成句は、ブラーフマナ文献に頻繁に用いられる。特に問題はない。*Prajāyeya* は *Pra-jan* の願望法である。*Pra-jan* は「生まれる」、「繁殖する」というくらいの意味である。しかるにシャンカラは *prajāyeya* について、*prajārūpeṇāham evotpadyeya* と注釈している。もしシャンカラの注釈に従うならば、*prajāyeya* は「わたくしは子孫の形態として生まれるであろう」というふうに訳してもよいで

あろう。しかし、この場合には、シャンカラよりもむしろマクス・ミュラーの訳の方が原義に近いであろう。ミュラーは、次のように訳している——……*that I may have offspring*, と。しかしペートリンク, ドイツセン, あるいはヒレブランツなどのように, *Pra-jan* を「繁殖する」と訳すのが適切であるように思われる。

しかし, *Pra-jan* をどう訳すかはそれほど重要ではない。問題は、次の構文の解釈である——*so 'kāmayata jāyā me syād atha prajāyeyātha vittam me syād atha karma kurvīyety etāvān vai kāmo necchams canāto bhūyo vindet*. マクス・ミュラーは上のテキストを次のように訳した——*He desired, 'Let there be a wife for me that I may have offspring, and let there be wealth for me that I may offer sacrifices.'* Verily this is the whole desire, and, even if wishing for more, he would not find it, と。しかし、この英訳に関する限り、アーツマンの願望は二つしかなくなってしまう。妻と富の獲得がアーツマンの全願望ということになる。原文を読めば、妻をもつことがアーツマンの基本的な願望であることが明らかである。そして、この願望が成就されれば、子孫、財産、および祭りの行為という三つの願望も叶えられる。問題の箇所 (*so 'kāmayata……bhūyo vindet*) を、わたくしは次のように訳したい——それは欲した——「わたくしに妻があるように。そうすれば、わたくしは繁殖するであろう。そうすれば、わたくしには財産があるであろう。そうすれば、わたくしは祭りの行為を行なうであろう。これよりも多く望んでも、それは見いださないであろう」と。その次の文章は前の文章の繰り返しであり、文法的に特筆するほどのことはない——*tasmād apy etarhy ekāki kāmayata jāya me syād atha prajāyeyātha vittam me syād atha karma kurvīyeti*.

*Sa yāvad apy eteṣām ekaikam na prāpnoty akṛtsna eva tāvan manyate*——それは、今日でもなお、これらの各々一つでも獲得しない限り不完全であると考え。Eteṣām というのは、すでに言及された妻などの四つの願望を指す。それらのなかの一つでも欠けていれば、アーツマンは不完全である、という意味である。この場合のアーツマンは、死すべき存在としての人間を示唆する。シャタパタ・ブラーフマナ, 5, 2, 1, 10 には、妻は夫の半分であるという記述がある。男は女 (= 妻) を獲得しな



ければ完全でない、と考えられる。しかし、われわれのウパニシャッドにおいては、全人であるためには、妻だけでなく、子孫、財産、および祭りの行為が必要である。

しかし、アートマンの完全性については、われわれは次の事柄を考慮に入れなければならない——*tasyo kṛtsnatā mana evāsyā 'tmā vāg jāyā prāṇaḥ prajā cakṣur mānuṣaṃ vittaṃ*. われわれは、上のテキストを次のように訳すことが出来る——そして、その完全性は次の通りである。そのアートマンはまさに心である。その妻はことばである。その子孫は息である。その人間的な財産は眼である。「完全性」とは、すべての構成部分を備えていることである。アートマンは心、ことば、息、眼、および耳である。*Cakṣuṣā hi tad vindate śrotraṃ daivam śrotreṇa hi tac chṛṇoty*——このように述べられている。アートマンの人間的な財産が、なぜ、眼であるかと言え、それは眼によって見いだすからである。神的な財産が耳であるのは、耳によってそれを聞くからである。

さて、われわれは、今や、次のテキストについて、考察をしなければならない——*ātmaivāsyā karma 'tmanā hi karma karoti*. シャンカラはここで *ātmaiva 'tmeti śarīram ucyate* と注釈している。同様に、彼は *ātmanā hi karma karoti* という箇所を、*ātmanā hi śarīreṇa yataḥ karma karoti* と言っている。もしもシャンカラの注釈を認めれば、われわれはアートマンに関して次のような対応関係を承認することが出来るであろう——

- ① アートマン————心
- ② 妻————ことば
- ③ 子 孫————息
- ④ 財 産 { 人間的財産——眼  
          { 神 的 財 産——耳
- ⑤ 行 為————身 体

しかしながら、それにもかかわらず、*ātmaivāsyā karma ātmanā hi karma karoti* におけるアートマンを、わたくしはシャンカラ流に「身体」と解釈することに抵抗を感じる。*Ātmaivāsyā karma*——このテキスト



を、わたくしは「その行為は、まさにアートマンである」と訳す。Ātmanā hi karma karoti——なぜなら、それはアートマンによって行為を行なうから。アートマンは身体であるというよりも、むしろ心、ことば、息、眼、および耳からなる全体的なもの、いわば、全人である。そして、この全体的なものとしてのアートマンの本質は現象の背後に隠れているのではない。アートマンの行為が現象する、とわたくしは解釈する——*ātmaivāśya karma*<sup>18)</sup>。アートマンとは何か？ それは、心、ことば、息、眼、および耳からなる統合された人間、完全な人間のことを指す。そして、このアートマンの行なう行為が、すなわち、アートマンにほかならない。アートマン（人間）は、その行為である——われわれはこのように言うことを許されるであろう。人間（＝アートマン）は、まさに彼の行為（＝カルマ）である。なぜなら、それは人間（＝アートマン）によって行為をするからである。行為とは別にアートマンが存在するわけではない。アートマンは、その行為にほかならない。

Sa eṣa pāṅkto yajñah pāṅktaḥ paśuḥ pāṅktaḥ puruṣaḥ pāṅktam idaṃ sarvaṃ yad idaṃ kiñ ca tad idaṃ sarvaṃ āpnoti ya evaṃ veda——祭祀に関連して若干の興味深い箇所 (pāṅkto yajñah, pāṅktaḥ paśuḥ, pāṅktaḥ puruṣaḥ) もあるが、アートマン思想に関しては特筆すべきことはない。強いて言えば、*tad idaṃ sarvaṃ āpnoti ya evaṃ veda* という表現は、ウパニシャッド的な特徴を示すものである。I, 4, 17 に関する言語的な検討を、わたくしはこれをもって終わる。

**I, 4, 17 (訳)**——ここには最初アートマンだけが存在していた。それは欲した——「わたくしに妻があるように！ そうすれば、わたくしは繁殖するであろう。そうすれば、わたくしに財産があるであろう。そうすれば、わたくしは祭りの行為を行なうであろう。たとい、これより多くを望んでも、人はそれを見いださないであろう。それゆえ、現在でも単独でいる人は次のように欲する——「わたくしに妻があるように！ そうすれば、わたくしは繁殖するであろう。そうすれば、わたくしには財産があるであろう。そうすれば、わたくしは祭りの行為を行なうであろう」、と。これらの各々一つでも獲得しない限り、人は不完全であると考え。そして、その不完全性は次の通りである——そのアートマン

は、まさに心である。その妻は、ことばである。その子孫は、息である。その人間的な財産は、眼である。なぜなら、人は眼によってそれを見いだすから。神的な財産は耳である。なぜなら、人は耳によってそれを聞くから。その行為は、まさにアートマンである。なぜなら、それはアートマンによって行為を行なうから。これは五重の祭祀である。これは五重の犠牲獣である。これは五重の人間である。およそここに存在するものは何であれ、この一切は五重である。それゆえ、このように知っている人は、この一切を獲得する。

### 要 約

**I, 4, 1—5.** アートマンによる世界創造が説かれている。アートマンは人間の形をしていたのであり、この人間としてのアートマンは自己をアートマン（夫）とその妻に分割し、配偶となって人類を始め蟻に至るまで一対をなすものを創造した。世界創造が男女のセックスによってなされるという着想は極めて興味深いものがある。創造 (*sr̥ṣṭi*) に関して特記すべきことの一つは、創造者と被造物の間にまったく区別のないことである。

**I, 4, 6.** アートマンは人間（＝死すべき存在）であるにもかかわらず、自己のなかから不死なるもの、すなわち、アグニ（火）およびソーマ（湿気）を始めとして神々を創造した。この創造はセックスによるそれと区別して「超創造」(*atiśr̥ṣṭi*) と呼ばれる。

**I, 4, 7—10.** ここでは、アートマンが創造であるというよりも、むしろ万物に内在する全体的なものであることが説かれている。そして、それと並んでブラフマンが「この一切」(*idaṃ sarvam*) であることも述べられている。すべての個別的なものは「名称と形態」であり、アートマンは全体的なものである。ブラフマンもまたアートマンと同じく *sarva* である。

**I, 4, 11—15.** これらの箇所に関しては、ブラフマンによる世界創造がテーマである。ブラフマン（＝バラモン階級）を始めとして、クシャトラ（＝クシャトリヤ）、ヴィシュ（＝ヴァイシュヤ）、およびシュードラの神적인ならびに人間的な階級の創造が説かれている。そして、王権をチェックするものとして、ダルマ（法）の重要性が強調される。

**I, 4, 16—17.** ここでは、ふたたびアートマンが主題になる。五大祭、すなわち、神々、聖仙、祖先、人間、および動物に対する奉仕によって、

アートマンはすべての存在の生活領域になる。そして、このアートマンは心 (manas) として、自己の配偶者であることば (vāc) の助けを借りて創造する。アートマンは心、その妻はことば、その子孫は息、その財産は眼と耳、その行為は身体である。しかし、アートマンは形而上学的な原理ではなく、心、ことば、息、耳、眼、および身体からなる。アートマンとは、要するに、広い意味での「行為」にはかならない。この行為と別にアートマンが存在するわけではない——*ātmaivāśya karma* (その行為がアートマンである)!

## 〔注〕

- 1) *Upanischaden Altindische Weisheit* (1921)。54-58 ページ参照。
- 2) *Berichte übes die Verhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig. Philologisch-Historische Classe. Neunundvierzigster Band*, 1897, p. 93。
- 3) Robert Ernest Hume: *The Thirteen Principal Upanishads* (1921, p. 81)。
- 4) アグニ (火) とソーマ (神酒) は祭祀の要素・材料である。そして、祭祀と密接な関係があるのはブラフマンである。もしも男女という一対による創造がアートマンの「創造」(sṛṣṭi) であるとすれば、アグニとソーマという祭祀の二要素による創造はブラフマンの「超創造」(atisṛṣṭi) でなければならない。
- 5) *Der Ātman in der Grossen-Wald-Geheimlehre (Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad)*, p. 18。ヴァン・ゲルダー女史は、本書においてユングの心理学の立場から最古ウパニシャッドの解釈を試みている。女史の心理学的な解釈が正しいか否かは疑問であるが、女史は本書において興味をそそる提案をしている。
- 6) 同上。
- 7) タイテッリーヤ・サンヒター, 7, 4, 2, 1: yathā vai manuṣyā evaṃ devā agra āsan. シャタパタ・ブラーフマナ, 11, 2, 3, 6: martyā ha vā agre devā āsuḥ sa yadaiva te brahmaṇāpur athāmṛtā āhuḥ。
- 8) アートマンは、人間のなかの不死なるものである。Joachim Friedrich Sprockhoff は、*Die feindlichen Toten und der befriedende Tote* というテーマのなかで、アートマンがブラーフマナ文献において「人間のなかの不死なるもの」であることに言及し、文献を挙げている (シャタパタ・ブラーフマナ, 10, 4, 2, 21; 9, 1, 2, 33; 10, 1, 4, 1; アイタレーヤ・ブラーフマナ, 3, 14, 1; ジャイミニヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ, 3, 30)。氏の論文は、*Leben und Tod in den Religionen Symbol und Wirklichkeit*, Herausgegeben von Gunther Stephenson, 1980 のなかに収められている (pp. 203-284)。

- 9) *The principal Upaniṣade*. Ed. with Introduction. Text, Translation and Notes, 2 impression, London 1968, p. 166.
- 10) *Über die Bedeutung des Wortes upaniṣad*, Rocznik Orientalistyczny, Vol. 3, Warsaw, 1927, pp. 58-67.
- 11) ただし, I, 4, 9—10 の主題は, アーフマンではなくブラフマンである。
- 12) *Indische Studien, X, Collectanea über die Kastenverhältnisse in den Brâhmaṇa und Sûtra*, pp. 9-10。ヴェーバーは次のように訳している——  
Doch aber ist das brahman die Quelle (yoni) des kṣatram, und wenn ein König noch so hoch steigt, schließlich wendet er sich doch wieder an das brahman (upaniśrayati)。
- 13) Jhering, *Der Zweck im Recht*, Zweiter Band, 6-8 Auflage, 1923, p. 41 および 44 ページ参照。
- 14) *Loka, the World and Heaven in the Veda*, Amsterdam, 1966, p. 106 参照。しかしウパニシャッドに関する限り, ヴァン・ゲルダー女史は loka を *Lebensfeld* と訳している: *Der Ātman in der Grossen-Wald-Geheimlehre*, p. 21。
- 15) 女史は前掲書のなかで次のように述べている——In 15 wurde der Mensch zum integrierten Menschen, in dem Mensch und Ātman verschmolzen sind, p. 22。
- 16) *Promise of safety* は, ウパニシャッドの最大の特徴の一つである。
- 17) ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド, I, 2, 4 にはアートマンが manas (心) として「ことば」(vāc) と性交したという記述が見られる。
- 18) I, 4 に関する限り, アートマンは現象の背後, あるいは現象のなかに隠れている本質ではない。アートマンはその行為を通じて Upās することが出来るからである。

### 〔追 記〕

ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド I, 4 に関する限り, いわゆる「梵我一如」(brahmātmaikya) の思想は存在しない。すでに検討済みのように, *brahma vā idam agra āsīt tad ātmānam evāvet | ahaṃ brahmāsmīti* というテキストに関する限り, *ātmānam* は再帰代名詞として使用されているにすぎない。そして *tad ātmānam evāvet* を直訳すれば, 「それ (=ブラフマン) は自己を知った」ということになる。しかし, このことから, われわれはアートマン (自我・自己) を読み取ることは出来ない。I, 4, 10 においては, *brahma vā idam agra āsīt* と述べられているのであり, 最初に存在したのはブラフマンだけである。従って, 唯一の存在であるブラフマンが自己自身 (=ブラフマン自身) のことを, 「わたくしはブラフマンである」と知ったのである。「わたくし」というのはブラフマンのことであり, アートマンを指しているのではない。

I, 4, 2 の冒頭の文句は次の通りである——*so 'bibhet tasmād ekākī bibhet*。ブラーフマナ文献およびウパニシャッドにおいて, もっとも強烈な恐怖は死に対する恐怖である。しかるに当該箇所において奇妙に思われるのは, 死に対する恐怖の感情が何処にも見いだされないことである。つまり, ここではアートマンは人間の

形をしたものであり、その性質上、死すべき存在 (*martya*) である。不死への希望は、I, 4 には存在しない。アートマンはただ孤独を嫌い、伴侶を求め、子孫を欲したのである。宗教においては、人間は死への存在であるというこの単純な事実は容易に認められない。人は自己が死なないことを、つまり、アートマンの不死を希求する。しかるに、われわれが扱っているウパニシャッドの箇所には、不死の願いは存在しない。創造の動機は、孤独を解消することにほかならない。I, 4, 1—5 における最大のテーマは不死になることではなく、人間 (=アートマン) が創造 (*srṣṭi*) であるということである。

アートマンが不死を希望しないということは、*atha ya ha vā asmāt lokāt svaṃ lokam adṛṣtvā praiti* という文句によって確認される。「この世」と「あの世」を対比させ、死後、来世におもむくことを容認しない限り、不死への希望はない。それゆえ、人は *loka* を「来世」と訳すのを好む。しかし、われわれのウパニシャッドの I, 4 に関する限り、「あの世」への言及はない。*Svaṃ loka* は、死後おもむくべき「あの世」ではなく、日常生活において人の経験する「生活領域」である。終局的に人間は死すべき存在であるということ認めれば、来世は存在しないはずである。すべては死とともに終わるからである。

ブラフマンが宇宙原理、アートマンが個体原理であるという解釈は正しくない。宇宙原理としてのブラフマンが個体原理としてのアートマンと合一するという「梵我一如」は、I, 4 には見いだされない。I, 4, 7 において例証されるように、アートマンは個体原理ではない。アートマンは、「名称」と「形態」とはまったく別の原理、すなわち、全体性原理である (*akṛtsno hi saḥ*)。ブラフマンは「この一切」である (I, 4, 10)。アートマンもブラフマンも、いわば全体性原理であり、個体原理ではない。アートマンとブラフマンの合一という思想は、I, 4 においてはその痕跡すら存在しない。

*Upās* は、従来、「崇拝する」と訳されたが、われわれは今やこのような考え方を放棄しなければならない。I, 4, 16 には *ātmanam eva lokam upāsita* という文句がある。これは決して「アートマンを来世として崇拝すれば、そのように崇拝する人は、死後、来世に行く」ことを意味するのではない。I, 4, 7 における文句——*ātmety evopāsita*——も同じである。ここで意味されているのは、全体的なものの、一つであるものとしてのアートマンを熱心に求め、アートマンを自己のものにしようという志向である。*Upās* は、現実自己の前にある対象を自己のものにするために努力することであり、あの世への希望とは何のかかわりもない。*Upās* の目的は、自己が全体的なものになることである——*ātmety evopāsita*。ウパニシャッド一般において、少なくとも、われわれのウパニシャッド (I, 4) に関する限り、梵我一如は説かれていない。アートマンは全体的なものであり、すべてはこのアートマンにおいて一つになる (I, 4, 7)。また、ブラフマンの知識 (*brahmavidyā*) に関して、それによって *tat sarvam* になることが目指されている。*Aham brahmāsmīti sa idaṃ sarvaṃ bhavati* (I, 4, 10) という文句は、われわれに *Upās* の真の目的で伝えるであろう。*Upās* の「果実」は来世ではなく、*idaṃ sarvam* になることである。

結局、われわれのウパニシャッドの I, 4 に関する限り、「この世」と「あの世」という二つの世界は容認されていない。また、ここには本質と現象の区別も存在しない。ここでは、アートマンは全体的なものである。ブラフマンもまた「この一

切」である。そして、全体性原理に対立するものとしての個別性原理は存在しない。I, 4 に関するわたくし自身の言語的検討によれば、個別的なものは存在理由をもっていないことが知られる。*Sa yo 'ta ekaikam upāste* ということと、*aham evedaṃ sarvam* ということとは、まったく異質の体験に属する。

わたくしがここで扱ったブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド、I, 4, 1—17 は、思想史的にも重要である。しかし、この箇所を言語的に検討するに際して、われわれは自己自身の考えをウパニシャッドのテキストのなかに読み込むべきではない。われわれは、われわれのテキストの真意が何かを即物的に観察し、叙述しなければならない。思想的な検討は、別の機会に譲らねばならない。